

43064

教科書文庫

4
8/0
32-1913
25000 28048

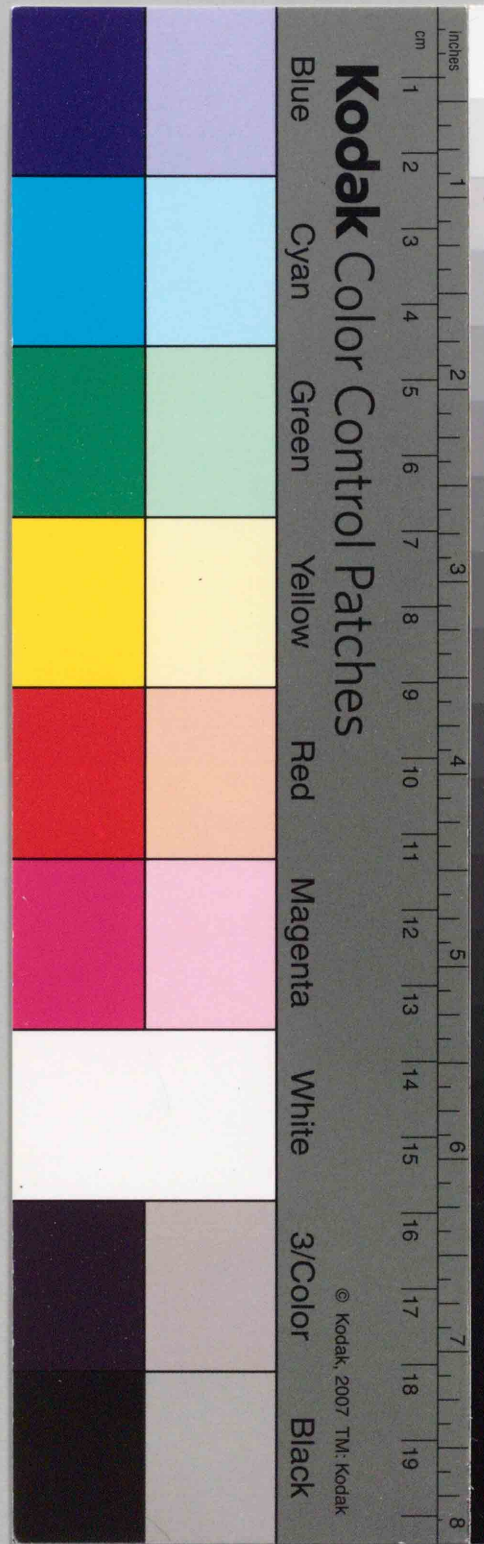
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



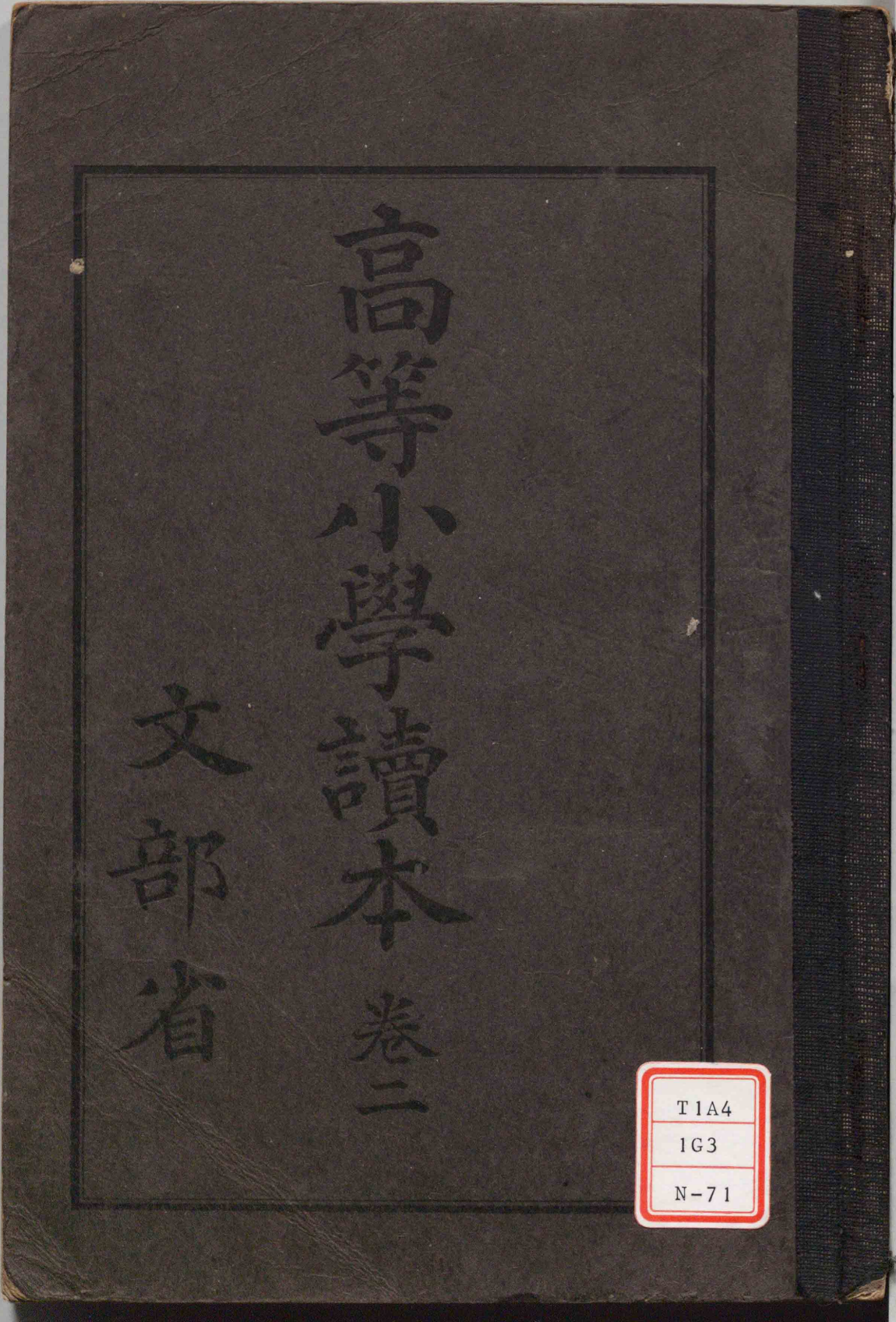
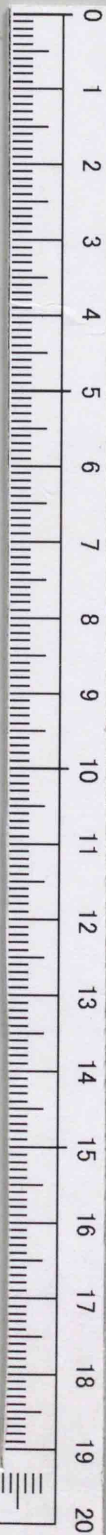
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches



Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



高等小學讀本 卷二

文部省

T1A4
1G3
N-71



1914年 廣東省立第一師範學校



高等小學讀本 卷二

文部省

登錄號碼	28048
分類	375.98
類	M

目録

第一課	孝明天皇	一	第十六課	村上義光	七十三
第二課	英國民	四	第十七課	スエズ運河	七十八
第三課	製紙場を観る	十	第十八課	埃及の遺蹟	八十三
第四課	森林	十六	第十九課	文字	八十九
第五課	上野動物園	十八	第二十課	雪	九十三
第六課	植物と氣象	二十二	第二十一課	ビクトリヤ女帝	九十六
第七課	維新の三傑	二十六	第二十二課	待賢門の戰	百二
第八課	悔狀	三十一	第二十三課	地震	百六
第九課	揚子江	三十六	第二十四課	ビスマークの幼時	百十三
第十課	漢土雜話	四十二	第二十五課	慈善	百十九
第十一課	護國の眼と腕	四十七	第二十六課	看護の心得	百二十二
第十二課	新井白石	五十四	第二十七課	進取	百二十六
第十三課	贈物	五十七	第二十八課	征衣上途	百二十九
第十四課	會社	六十	第二十九課	奉天附近の大會戰	百三十四
第十五課	我が國の水産業	六十四	第三十課	學校園	百四十三

高等小學讀本卷二

第一課 孝明天皇

孝明天皇御名を統仁なまひとと申し奉り、仁孝天皇の第四の皇子にまします。天保二年六月十四日御降誕あらせられ、ひろのみや熙宮と稱し奉る。同十一年三月十四日皇太子に立たせられ、同十五年三月二十七日に御元服、弘化三年仁孝天皇崩御あらせられしより、二月十三日御踐祚あり、時に御年十六にましくき。かくて同四年九月二十三日即位の禮を行はせられ、明年元を嘉永と改めらる。天皇は在位二十一年、御即位の年より數ふれば二十年

にして、慶應二年十二月崩御あらせられ、其の三年正月二十七日に泉涌寺後山に葬り、御陵を後月輪東山陵と稱し奉る。御年僅かに三十六歳にして世を去り給ひしは臣子たるものの哀痛に堪へざる次第なり。

天皇御性質英明剛健にましく、御在位中は御少壯の御時なれば、殊に勵精して治を圖り、皇運の衰微を歎き、武臣の專横を憂へ給ふ御志日にあつく、御憤年に深くましませしに、嘉永年中より亞米利加合衆國を始として、外國の船艦陸續として渡來し、和親貿易を強請せり。太平日久しく、上下安逸を事とせし際なれば、海内之が爲に騷然たり。幕府周章の餘、遂に其の請を許せしか

ば、幕府の處置を憤りて、尊王攘夷の論盛に起り、又開國の議を唱ふる者あり、鎖港の説をなす者ありて、紛々として底止する所を知らざりき。

天皇此の事を聞かせ給ひて、日夜深く叡慮をなやませられ、屢、神宮を始として、諸社に御祈あり、又畏くも身を以て國難に當らんとさへ祈らせ給へり。此の頃の御製に、

朝夕に民安かれと思ふ身の

心にかゝることくにの船。

かく御心勞を重ねさせ給ひしかども、當時の皇室は御實力とてはおはせず、又諸侯の中には勤王の心厚き藩

主も少からざりしが、多くは藩論區々にして一定せず、  
叡慮の程も四海の人心に徹底せざりしは是非もなき  
世の様なりき。

其の後正議漸く勢を得て、世局一變し、明治の盛世とな  
りては、内治外交、諸般の政務悉く舉り、國運の盛なるこ  
と前古比なきに至れり。此の形勢をみそなはしなば、如  
何ばかり叡慮を安んぜさせ給ひしならんに、中道にし  
て御早世遊ばされしこそ返すべくも口惜しけれ。

## 第二課 英國民

英國が今日の盛大を致せる所以、固より一にして足ら  
ずといへども、其の主とする所は、之を國民の性質と氣

風とに求めざるべからず。抑英國民は如何なる國民な  
るか。

英國民は最も活動を好む國民なり。彼等は一刻の間も  
無爲に過すを欲せず、必ず何物かを求めて、絶えず活動  
す。其の活動するや、活動の爲に活動すともいふべく、必  
ずしも結果の如何を思ひて然するにあらず。英國の社  
會に遊戯運動の盛なるも亦これが爲なり。資産餘りあ  
り、活動の必要なき貴族・富者も徒らに坐食することな  
く、多くは一定の職業を求め、又自ら進んで公共事業に  
盡力し、其の子弟も亦獨立して、或は亞弗利加に、印度に、  
或は濠洲に、加奈陀に、半開民の間にも、各自活の道を開

けり。英國民の筋肉には活氣充滿し、之を發散せずんば一種の不快に堪へざるもの如し。

英國民は一事に専心なり。一定の業務に従事する間は、之に向つて精力を集中し、心絶えて他事に及ばず。官廳、會社、商店等にて執務するものを見るに、始業時に出勤するや、直ちに各自の机に向ひ、一定の時間の外には、終業時に至るまで喫煙せず、喫茶せず、雑話せず、一心不亂に其の業務に従事すること、恰も勇士の戰場に在るが如し。

英國民は信義を重んず。商業上の取引に於ても、普通の交際に於ても、約束を違ふるが如きこと極めて稀なり。

人と約束するに當りては、先づ之を決行し得べきや否やを考へ、確なる見込立たざるときは、決して約束することなし。例へば商店にて物品を買ふに、或時間に送達せんことを求むれば、店員は先づ時計を見、時間と距離とを計りて、然る後諾否の答をなす。若し其の時間に送達し難しと思へば、寧ろ他店に就きて之を求めんことを勧む。英國商人の世界到る處に成功したる所以のもの即ち此に在り。

英國民は最も自由を貴ぶ。生命・財産・名譽・言論等に對し、いさゝかにても他人の侵害を許さずといへども、又頗る自制力に富み、能く國家の法規に服従し、社會の慣習

を尊重す。人馬群集の街上に於て、能く警官の指圖に従ふも之が爲なり。

英國民は獨立獨歩、自ら其の分を盡し、自ら樂しむを以て足れりとす。必ずしも人と相交り相談ずるを要せず。或佛國人の言に曰く、英國の職工は唯一人新聞を讀み、たましく快心の事ありとも、之を其の朋友に告ぐることなし。と。人煙稀なる未開の地に新天地を開拓して、孤獨の感を抱かざるは此の氣風あるに由る。

英國民は率直にして、他人の意を迎ふることを務めず。カーライルが「英國人は無言の民なり。」と言ひし如く、多くは寡言にして、且みだりに笑顔を示さず。故に無愛想

にして親しみ難けれども、一旦知己を以て相許すに至れば、交情頗る厚し。

英國民は實行を貴びて、虚名を欲せず。故に英國には無名にて社會事業に盡すもの多く、公共の爲に出金するも、其の金額と姓名とを麗々しく廣告するが如きことなし。

英國民は自尊の心強く、己を持すること高し。随つて各人自己の名譽を重んじ、品行をつゝしむ。労働者もなほ紳士を以て自ら任じ、社會も亦紳士として之を遇す。又英國民は保守的にして、自國の文物・制度を尊重し、容易に之を改廢するを欲せず。英國にては先例は法律より

も重んぜらるゝこと多し。外國に移住するも依然として自國の國語を用ひ、自國の風俗習慣を守り、他國人に同化すること少し。

## 第三課 製紙場を觀る

或日叔父と共に製紙場を觀る。先づ驚きたるは方十數町の地域内に山積せる木材なり。いづれも長さ二間内外にして、悉く皮をはぎたり。是即ち製紙の原料なりといふ。刺を通じて參觀せんことを請へば、一人の技師出で來り、快諾の旨を告げて工場に導く。

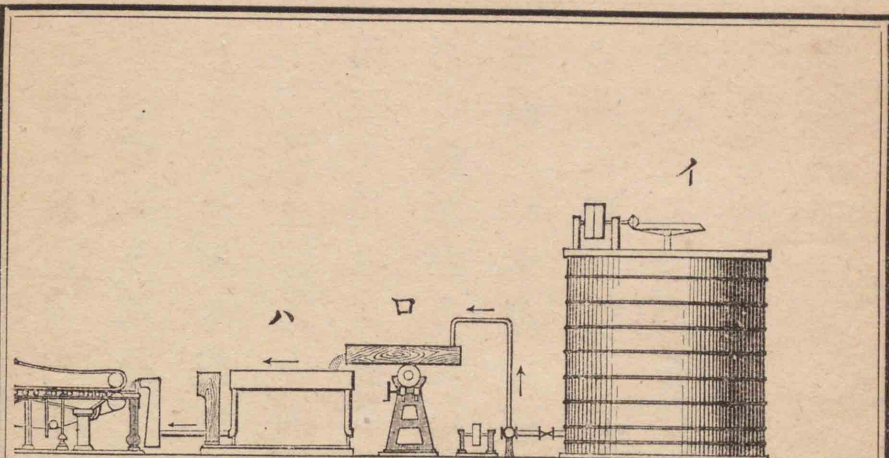
第一工場に入れば、蒸氣の力によりて運轉する鋸仕掛の機械あり。彼の木材を二尺餘の長さに斷つ。木の種類

を問へば、唐檜たうひ、白檜しらべ、梅つばき等なりと答ふ。隣室に鉋かんを裝置せる機械あり。切斷したる木材を削りて、長さ三四寸の薄片となす。宛も鱗節かろふぶしを削るに似たり。薄片は旋風機によりて吹上げられ、長き管によりて次の工場に送らる。

第二工場には高さ六間、直徑二間程の直立せる大鐵釜あり。技師語りていふ、此の釜は彼の薄片に藥品を加へ、蒸煮して木材の組織を破壊し、有用なる纖維物を採るの用に供するものなりと。釜の前に大なる溜槽たろあり。蒸煮したるものを此の中にて洗ひ、水を混じて、ぼんぷによりて他の工場に送る。

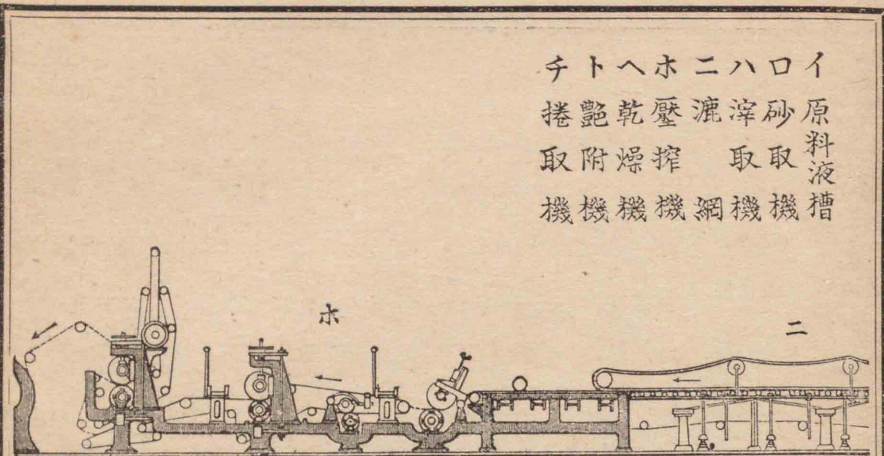
次に第三工場の階上に行く。楕圓形の槽の長徑二十四



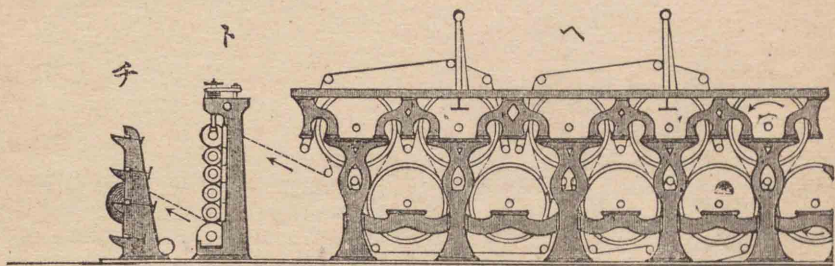


五尺、短徑十二三尺、深さ三尺程なるが幾つも並べるあり。各槽にはぼんぷにて送られたる蒸煮物を充て、ロールを運轉せしめて、種々の作業を爲す。槽毎に一二の職工ありて、各種の作業に従事せり。原質を洗ひて清潔になすも此處、不用物を離解するも此處、漂白するも此處なり。此の外、藁ぼろ其の他の原料より造りたる原質を調合するも此處なれば、纖維を適當の

イ 原料液槽  
ロ 取取機  
ハ 取取機  
ニ 漉滓機  
ホ 壓搾機  
ト 乾燥機  
チ 捲取機



大きさになすも此處なり。原質調製は一切此の階上に於て行はると聞けど、我等は唯灰色の原質が次第に白くなり、細かになりて、糊の如き液汁となり、ぼんぷによりて階下に送らるゝを見るのみ。階下には抄紙機あり。運轉する眞鍮製の精巧なる金網と、鐵製のロール及び圓筒數十とより成る。階上より來る原質を、此の金網の上を通過せしめて水を去り、之に連



接せる白毛布にて包みたるロールに捲かせて、更に水氣を去り、次に蒸氣にて暖めたる圓筒の間を通過せしめて、之を乾かす装置なり。紙の厚薄は此の金網の上を通過する原質の分量によりて定まるといふ。金網の下に落つる點滴のかしましさは夕立にもまさり、蒸氣の通ふ圓筒の邊に立つ湯氣は春の野に立つかげろふにも似たり。

糊の如き液の次第に紙狀となりて、ロールに捲出され、更に光澤を附するロールを経て、完全なる紙となりて捲取らるゝ様最も目を驚かす。我等の見たるは普通印刷物に使用する西洋紙にして、幅四尺程の美しき紙なりしが、一分間に百尺の紙を抄くと技師は説明せり。若し運轉を速ならしめんか、一分時に二百尺の紙を抄き得べしといふ。之に要する職工は僅かに四五人のみ。見終つて隣室に行く。此處には多くの女工ありて、紙を整理して、包装に忙はし。他に木材を磨碎して原質を製する處等なほ二三の工場ありしが、時間迫りたれば、叔父と共に深く技師に謝

して歸る。

第四課 森林

一 梢々をゆり動かして、

風東よりさゝやき來れば、

葉末々々の露きららくくと、

光りて落つる曉の森林。

二 小鳥の群はねぐらを出でて、

清き泉にのんどうるほし、

朝日きらめく枝に居並び、

胸毛そよがせ喜び歌ふ。

三 をのをになへる柚人二人、

細路傳ひよぎりし彼方、

きゝとさけびて小猿逃ぐれば、

木の實こぼるゝ晝の森林。

四 木の間に白き湖そめて、

深紅の太陽西へ沈めば、

雲はしづくゝ谷より出でて、

峯を取捲き木立を包む。

五 驚き顔に鳴くひぐらしの、

聲一しきり止みにし後を、

またゝく星に夢護らせて、

静かに眠る夜の森林。

## 第五課 上野動物園

東京上野公園ノ奥、清水谷トイフ處ニ、帝室博物館附屬ノ動物園アリ。廣サハ一萬二三千坪ニ過ギザレドモ、飼養セル動物ノ種類頗ル多シ。園内入口ニ近キ處ハ老樹枝ヲ交ヘテ、日影ヲモラサズ。地ニハ縞篋リユウノヒゲ龍髯リユウノヒゲナド一面ニ茂リテ、庭園ノ趣ヲナセリ。此處ニ濠洲産ノペリカントテ珍シキ嘴クサシノ鳥アレド、奥ニ聞ユル鳥獸ノ聲ニ誘ハレテ足ヲ止ムル者少シ。人ノ最モ好ンデ觀ル者ハ象獅子虎猿熊ク孔雀ジヤク駝鳥テウノ類ナリ。

象ハ丈高キ西洋館ノ中ニツナガレ、細キ眼ヲ觀客ニ注

ギテ、絶エズ其ノ長キ鼻ヲ動カス。前ニ藁ト鹽煎餅センベイトヲ賣ル處アリ。鼻ニテ捲上グル様ノ面白シトテ、購ヒテ投ズル者多シ。此ノ象ハ去ル明治二十一年暹羅シヤム皇帝ヨリ我ガ帝室ヘ寄贈セラレタルモノナリトイフ。

獅子ト虎トハ相隣リテ、嚴メシキ鐵柵モテ圍ヒタル建物ノ中ニ在リ。虎ノ眼ノ光ノ恐ロシキ、牙ノ太ク銳キ、足ノ強クタクマシキ、一目シテ其ノ猛獸タルヲ知ル。然レドモ轉ジテ更ニ獅子ヲ見レバ、其ノ威風堂々タル、流石ニ百獸ノ王タリトイフベシ。

猿ハ大ナル金網張ノ圍ノ中ニ在リ。滑稽ノ動作ヲ演ジテ來觀者ヲ笑ハシメ、時々キ、ト叫ビテ又人ヲ驚カス。

熊ニハ種々アリ。北極ノ白熊、北海道ノ赤熊、黑熊等何レモ肥太リタル體ヲ動カシテ嬉戲スル様ノ愛ラシサニ、薩摩芋煎餅等ヲ投與フル者多シ。鳥類ニモ亦面白キモノ多シ。錦雞、孔雀、山鳥ノ類ハ羽毛極メテ麗シ。其ノ外諸種ノ鳴禽ノサヘヅリ合フモノニギハシク、鸚鵡ノ人語ヲ學ベルモヲカシ。園ノ中央ニ圓池アリ。高ク金網ヲ張りテ之ヲオホヒ、中ニ鴻雁、鵝、鴨、家鴨、鵜、鷺、鳥、鷺、鸛等、數十種ノ水禽ヲ飼養ス。網ニハ寫生畫ヲ掲ゲテ、一々其ノ名ヲ附シタリ。鶴ハ數多ノ種類アル中ニ、丹頂最モ多シ。時々一齊ニ叫ブ。其ノ聲耳ニ徹スレドモ、諸鳥ハ之ガ爲ニサヘヅリヲ

止メズ。世ニイフ鶴ノ一聲モ、此處ニテハカヒナシ。彼方ニ犬ノホユルアレバ、此方ニ山羊ノ叫ブアリ。時々象ハ山崩ノ如キ大聲ヲ發ス。觀客ハ驚ケドモ、諸獸ハ慣レテ平然タリ。獅子ノホユルハ甚ダ稀ナリ。シカモ一タビホユレバ、諸鳥悉ク鳴リヲ靜メ、百獸皆恐レ戰キテ屏息ストイフ。魚ハ極メテ少シ。一ノ觀魚室アルノミ。此處ニハ金魚ノ外ニ山椒魚アリ。山椒魚ハキモリノ類ニシテ、古生物ノ遺存セルモノナリ。現今之ヲ産スルハ我が國ト清國ノ一部トニ限り、歐洲諸國ニ在リテハ、唯化石シタルモノヲ見ルノミナリ。

上野動物園ハ規模尙小ニシテ、設備モ亦未ダ完全ナラザレドモ、國産ノ外、寒熱二帶ニ互リテ、主要ナル動物ヲ網羅セリ。亞米利加ノインコ、亞弗利加ノ鱈魚、濠洲ノ袋鼠ヲ始トシテ、諸種ノ珍禽異獸ニ富メリ。サレバ遊覽ノ序、上野公園ニ入ル者ハ帝室博物館ト共ニ之ヲ訪ハザルナシ。

第六課 植物と氣象

春は霞がたなびいて、曇りがちの日が多い。此の空合に雲かとまがふ櫻の花の咲亂れて居るのは能く調和の美を現して居る。若しも此の花がすみ渡つた秋の空に開いたとすれば、優美艷麗な櫻の特性は十が一も現れ

まいと思ふ。又霞たなびく春の野に、紫雲英、蒲公英などが一面に咲亂れて、蝶・蜂などの舞遊ぶのは如何にもどこかな春の景色をつくる。

盛夏の候となれば、快晴の日でも、空氣は水分を含んで、何となく夕立の雲でも起りさうに思はれるが、其の青空に綠滴る木々の枝をさし交して居るのは亦配合の妙を極めて居る。やがて秋晴の節となれば、空氣は清らかになつて、遠くまでも透いて見える中に、楓・银杏などのもみぢして、快晴の空に照し出されるのは、實に言ひ難い趣がある。冬の寒空に梅臘梅などの春に先だちて咲出でたのも亦似つかはしい。

雨の面白いのは燕子花、花菖蒲、あやめなどの咲亂れる五月雨の頃である。降るかと思へば霽れ、霽れるかと思へば降出して、其の度毎に花の美しさを増す。殊に是等の植物の花弁と葉とは自ら雨を防ぐやうに出來て居て、雨水が小さい玉となつて其の上に留つて居る美しさは形容する詞もない。

雨の多い處に生育する植物、又はさういふ地方から移し植ゑられた植物には、自ら雷雨などの劇しい雨にふさはしいものが多い。かの青桐などは其の一例である。直立して膚の青い幹、きれ込んだ廣い葉の、一は新に洗はれて、一しほ鮮緑の色を増し、一ははらくと音を立

てて、葉末から餘滴を垂らす光景、能く其の急雨に適して居る様が見える。蓮の葉も雨を受けるのに適して居る。蓮の葉の表面には天鵞絨の様、に細い突起があつて、其の間に空氣を含んで居るから、雨に遇つても少しもぬれることが無い。且其の空氣は光線を反射するから、葉の上に留つた玉水に一種銀色の光を放たしめて美しい。芋の葉の構造も同様である。

秋雨について聯想する植物も少くないが、先づ人の心を引くのは芭蕉であらう。秋も末になつて、其の葉が破れ、條のあらはれたのは、見るからはかなげに思はれるが、其の上に雨のしとく、とうち注ぐのは取りわけて

物さびしい。

樅・杉・松などの緑色の葉が眞白に積つた雪の中から現れ出たのや、南天の赤い實が際立つて雪の中に目立つのなどは、色彩の配合上、見捨て難い美觀である。節くれ立つた松、しなやかな竹が積雪の重みに堪へて居るのは、一は剛健、一は清楚の趣を現して居る。

第七課 維新の三傑

明治維新の大業を翼賛し奉りし功臣中、公家より出でたる三條・岩倉の二公を除きては、先づ指を西郷隆盛大久保利通・木戸孝允の三士に屈せざるべからず。三士共に早くより勤王の大義を唱へ、東奔西走、廣く各藩の志

士と交り、王政復古の氣運を促進し、維新後も廟堂に立ちて大政に參與し、邦家柱石の臣として國民の景仰する所となれり。世に之を維新の三傑といふ。

西郷隆盛は薩摩の人なり。氣宇闊達にして、人に將たるの量あり。維新の初、官軍の參謀として東下し、幕臣勝安芳と會談して平和に事を了し、江戸の市街をして遂に兵火の慘害を免れしむるを得たり。其の後奥羽地方の賊軍を征討して、種々の功勞あり。後陸軍大將に任ぜらる。或時の詩に曰く、





幾歴辛酸志始堅。  
我家遺法人知否。

丈夫玉碎愧甄全。  
不爲兒孫買美田。

以て其の志の存する所を知るべし。

大久保利通も亦薩摩の人なり。沈着にして果斷、頗る大局に通ぜり。明治四年臺灣の土民、琉球人を殺せしより、明治七年征臺の役起る。此の時利通、全權辨理大臣となりて北京に到り、談判を完らし、償金五十萬兩を得て歸れり。北京を去りて、通州より天津に下る船中、一詩を賦して曰く、



奉勅單航向北京。

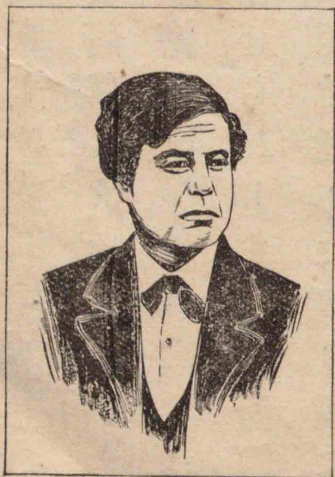
和成忽下通州水。

黑煙堆裏蹴波行。

閒臥蓬窓夢自平。

又内務卿として、力を内治に致せし所多し。東京御遷都の事も、利通の謀畫與りて力ありといふ。

木戸孝允は長門の人、機敏にして忠誠、獻替の功多し。維新の初、政權は朝廷に歸したれども、列藩は尙封土を領し、舊觀依然たり。孝允謂へらく、かくては王政復古も名義のみなり。宜しく七百年來の積弊を一掃し、三百諸侯をして舉つて其の封土を返納せしむべきな



りと。先づ其の藩主に説き、尋で薩摩・土佐・肥前三藩主の同意を得たり。是に於て其の他の諸藩も之にならひしかば、明治二年遂に全國諸侯の版籍奉還を見るに至れり。然れども舊藩主は知藩事に任ぜられしを以て、尙領主領民の情實を存せるものあり。明治四年に至り更に孝允等の盡力により、廢藩置縣の事行はれ、郡縣制の基始めて成れり。其の他元老院の設けられ、地方官會議の開かれたるも、皆孝允の首唱に因るといふ。

去歲千軍逼我疆。

今朝孤劍入他鄉。

浮生萬事變如夢。

一片依然男子腸。

以て孝允の意氣を見るべし。

明治六年征韓論起り、隆盛は利通・孝允等と議合はず、遂に冠を掛けて去り、明治十年亂を起して敗死せり。後朝廷其の罪を赦して正三位を贈られ、其の子に侯爵を授けられしは、維新の勳功を思召されしものにて、天恩無窮といふべし。孝允は明治十年病を以て京都に薨じ、利通は翌年刺客の手に斃る。いづれも正二位を贈らせ給ひしが、明治三十四年更に従一位を追贈し給へり。大久保・木戸の二家今皆侯爵たり。

第八課 悔狀

御母上様御逝去の電報を拜見致し、實に驚入候。先日來數度の御手紙にては、追々御快方の

模様にてこれあり、安心致居候處、突然の御凶報にて、全く夢かとのみ疑はれ候。御許様始め御一統御哀悼の程、深く御察し申候。御地の事故、名醫も少からず、御看護にも手落とはこれなくと存候。何か急に餘病にても相起候次第に候や。返すも残念に存候。就いては早速參上、葬儀萬端御世話致度候へども、何分遠隔の事として、とても間に合ひ申さず候。御悔の印までに別紙爲替券封入致置候間、御靈前に香花御供へ下され度候。御臨終の節は後々の事につき、色々申遣されし事もこれ有り候事と

存候。何と申しても今は唯思ひあきらめ候より外、これなく候。御許様御悲歎の餘り、健康を損ぜられ候様の事、これあり候ては、却つて亡き母上様にも申しわけなき儀に候。益、御身を大切になされ、一層奮發して一門の繁榮を計られ候事、地下の御兩親に對し、何よりの孝行と存候。差當り後始末に就いては本多の伯父様、上田の叔母様など御近處に候へば、とくと御相談成さるべく候。右御悔申述候。かしこ。

十一月二十三日

伯母より

常次郎様

同じく返事

御手紙拜見仕候。此の度の不幸に就いては、早速御弔慰を賜はり、其上過分の香花料御送り下され、有り難く、厚く御禮申上候。病中は度御見舞下され、其の都度容體御報知申上候通り、追々熱度も減退し、氣分も確に相成候故、此の模様なれば、心配致す程の事もこれなき様、醫師も申候に付、一同安心致居候處、二十一日の夕方に至りて、病勢頓に重り、數回注射を試み候へども、脈搏次第に弱り、十一時頃眠るが如く息を引取申候。醫師の申すには、腸窒扶

私の方は大方全快致候へども、夏以來脚氣にて心臟の衰弱致居候處へ、激烈なる發熱相續き候爲、心臟痲痺を起したる由に御座候。急に異狀を來し候事とて、皆々駈付け候時は既に人事不省にて、遺言とては何一つ聞くこと相叶はず、今更ながら残念に存候。當地親戚並びに知合の方々、何かと御親切に御世話下され、葬式も去る二十三日を以て相濟し申候。大勢御會葬下され、身分不相應と申す程盛なる葬式にて、是のみは亡き母も満足致候事と存候。後始末に就いては、仰の通り本多の伯父様、上

田の叔母様の御指圖を仰ぎ、緩々取計らひ申すべく候間、何卒御安心下され度候。先は御禮かたぐ右御報知申上候。 敬具。

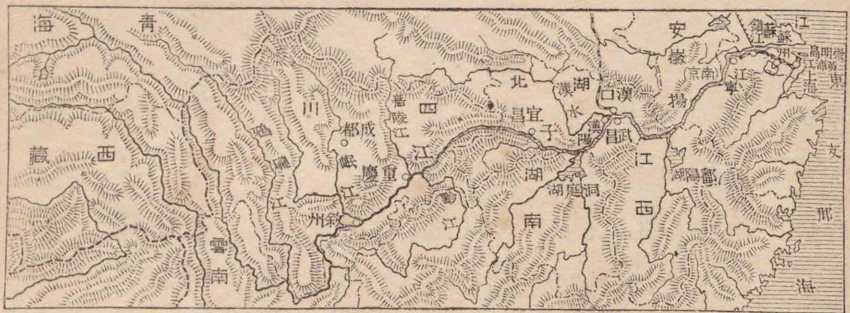
十一月二十五日

常次郎

御伯母上様

第九課 揚子江

揚子江は源を西藏東部の山中に發し、青海を過ぎ、支那本部を蜿蜒迂曲して、東支那海に注ぐ。支那本部に入りてより、一旦南流し、鴉礮江を合せて後東北に轉じ、敘州に至りて岷江と會す。岷江の平野に成都あり。蜀漢の舊都にして、今尙清國有數の大市たり。重慶に至りて嘉陵



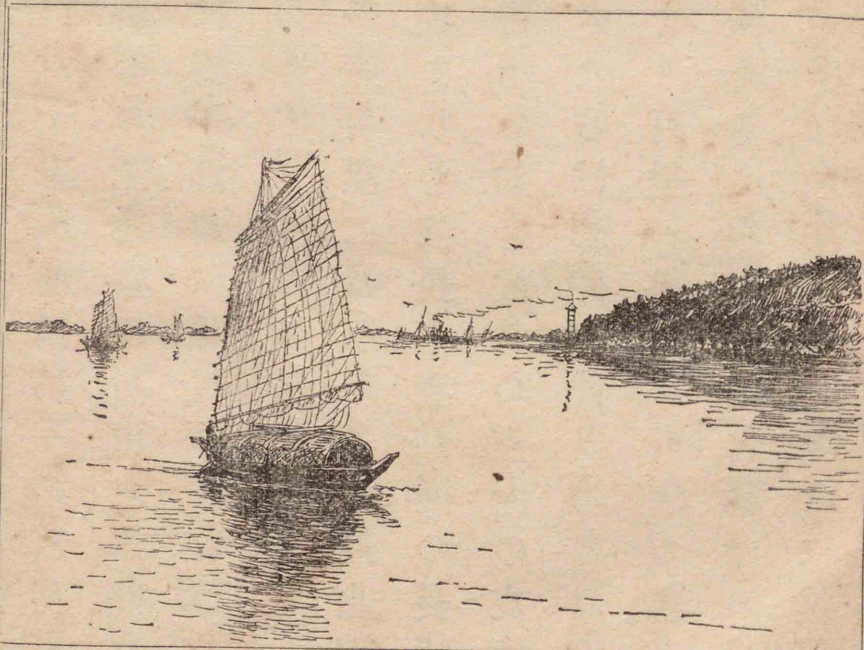
江を左岸に受け、尋で黔江を右岸に受く。重慶は下の關條約によりて開放せられし四港の一なり。重慶より宜昌に至るまでは、高山峻嶺の間を流るゝ處多く、斷岸絶壁左右に迫り、仰ぎて一線の青天を見るのみ。此の間古來稱して三峽の險といふ。宜昌より下流は左右概ね廣漠たる平野にして、又湖沼多く、左岸よりは漢水、右岸よりは洞庭鄱陽二湖の水を容れて、水勢益々洋々たり。江漢の會する處に漢口、漢陽、武昌の三市相

對立す。漢口は水路鐵道の便を併有し、人口約八十萬に及び、磚茶せんまつち等の製造盛にて、清國屈指の貿易港たり。漢陽は製鐵を以て名高く、武昌は紡績を以て著る。揚子江は古來單に江或は大江と稱し、後世に至りて始めて揚子江の稱あり。蓋し江寧附近なる下流の名を以て上流に及したるものなり。江寧は即ち南京にして、江の南岸に在り。歴史上頗る有名なる都會なり。鎮江に至りて大運河と交り、江口は崇明島の爲に二流に分れて海に入る。鎮江の東南に蘇州あり。春秋の世の吳の舊都にして、絹布の大産地なり。蘇州の東方に上海あり。揚子江の支流たる黃浦江に臨みて、我が長崎より凡そ四百

六十海里の處に位し、人口六十五萬、清國第一の貿易港たるのみならず、紡績造船等の工業盛に行はれ、水陸交通の大中心にして、直接に揚子江口に沿はずといへども、實に其の咽喉に當れり。

揚子江の全長は凡そ一千三百里に及び、千島の最北端より臺灣の最南端に至るよりも尙長く、我が國の長流と稱せらるゝ、信濃川石狩川の如きは、其の支流の支流にも及ばず、排水量の多大なるは想像に餘りあり。夏期増水する時は、濁流江口より百里の外にみなぎる。然れども之を世界第一の長流たるミシシッピ河に比すれば、尙短きこと三百里にして、ナイル・アマゾンの次に位し、

世界第四、亞細亞第一の長流たり。又其の流域よりいへば、支那本部の十二三省及び西藏、青海の二地方に互り、總面積十一萬方里餘、實に我が帝國全版圖の約二倍半に達せり。但し之を最大流域を有するアマゾン河に比すれば、其の四分の一に過ぎず。オビ・エニセ



ーレナ及び黒龍江にも及ばず。亞細亞諸河中の第五位に在り。

支那本部中、揚子江の流域は最も豊饒なる地方にして、殊に湖北、湖南、江西、安徽、江蘇の五省は沃野千里、際涯を見ず。人口亦稠密にして、米、茶、綿、生絲、絹布等の産物に富み、紡績、まつち製造、其の他の産業も亦大いに開けたり。本流、支流共に頗る航行に便にして、汽船は江口より約四百五十里の宜昌に到るべく、小舟は七八百里の上流、敘州にさかのぼるを得べし。可航里程よりいへば、世界屈指の長江たり。沿岸十數箇處の貿易港には各國の船舶常に入出入し、商業頗る繁盛なり。此の長江の古來支那

人文の發達に寄與せる所果して幾何ぞや。

第十課 漢土雜話

韓伯瑜<sup>はく</sup>といふ人、父を喪ひて母と二人して住めり。母は至りて嚴しき人にて、伯瑜に少しの過あれば、杖もてむちうつを常とす。伯瑜痛さを忍びて少しも怨める色なし。或日母例の如くむちうつに、伯瑜泣くこと頻りなり。母怪しみて其の故を問へば、是までむちうたる、毎に身に痛かりしかど、今日の痛からぬは母の年老いて力衰へ給へる故なりと思ひ、心弱くなりて泣くなり。といへり。

吳の國に延陵の季子といふ人あり。或時其の君の使に

て他國へ行く途にて、徐の君を訪へり。徐の君つらく季子の劍を見て、口にこそ言出でざれ、欲しと思ふ色面にあらはれたり。季子心には察しながら、君命を奉じて使する途なればと思ひて與へず。使の事終りて歸路に立寄りて見れば、徐の君既に死したり。季子大いに悲しみ、彼の劍を其の墓の側の樹に結びつけて歸りぬ。從者怪しみて、徐の君既に死せり。墓に掛けて誰に與へ給ふぞ。といへば、我さきに心の中にて與へんと思ひ定めたれば、其の人死したりとも、初の志を變ふべきにあらず。といへり。

春秋の頃晏嬰<sup>あひ</sup>といふ人、齊の國の相となれり。其の御者



馬にむちうちて揚々として自得せる色あり。御者の妻之を見て夫にいふやう、晏子は身の長六尺にも満たず、然るに齊國の相として、其の名諸侯の間に隱まし。思慮深ければ、出入にも人に下る様子あり。良人は身の長八尺、御者ととなりて誇らしき色あるはあさましからずや。といふ。夫大いに恥ぢて、これより自ら抑損せしかば、嬰は其の志を賞して、次第に之を高官に任用したりといふ。

後漢の鮑宣の妻桓氏、字を少君といへり。宣初め少君の父に就きて學びしが、父宣の清貧に安んじて勉學せるに感じ、遂に少君をして嫁せしむ。富者の事として、婚儀の

用意善美を極めたり。宣之を見て妻にいふやう、少君は富貴に生れて、美衣美食に慣れたり。我貧賤なれば如何にも釣合ひ難し。と。妻答へて、父は君の徳を修め約を守るを重しとして、入りて嫁せしむるなり。既に嫁したる身のいかでか良人の命に背かんや。と。其の日より侍女を返し、美衣を脱ぎ、短き布子を着て、小車を引きながら、宣と共に郷里に行きて宣の母に會へり。これより薪水の業を親らして、婦道を行ふこと固かりしかば、人々歎稱せざるは無かりき。

文天祥は宋末の忠臣なり。其の勤王の師を擧げし時、友あり止めていへるは、今敵兵三道より内地に薄る。君烏

合萬餘の兵を以て之に赴かんとするは、群羊の猛虎を  
りつに似たらずや。」と。天祥答へて、國家今日の急に天下  
の兵を徴すに、一人一騎の赴くもの無きこそ口惜しけ  
れ。我が力の足らざるを知らざるに非ず。身を以て國に  
殉し、天下の忠臣義士をして風を聞いて起たしめんと  
するのみ。」と。聞く者感動せざるはなかりき。軍敗れて虜  
となるに及び、元の相孛羅天祥に問ひて曰く、君既に宗  
社の保つべからざるを知りながら、猶力を盡せしは如  
何に。」と。天祥曰く、父母病あらば、快復の望なくとも、誰か  
一日も藥を廢せんや。救はれざりしは天命のみ。」と。元主  
之を其の朝に仕へしめんとして諭せども、應ぜず。遂に

刑せられて死せり。

## 第十一課 護國の眼と腕

昔羅馬がまだ方十數里の一小國であつた頃、今の羅馬  
市の中央を流れて居るチベル河の西には、別にエトル  
リヤといふ國があつて、二國の間には殆ど戦争が絶え  
なかつた。西暦紀元前五百年頃、エトルリヤにホルセナ  
といふ英雄が出て、羅馬を討平げようと企てて、急にチ  
ベル河まで押寄せた。羅馬の方では、敵に橋を渡られて  
は立ちどころに占領せられるであらうといふので、上  
を下へと大騒であつた。  
時にホラチウスといふ拔群の勇士があつた。僅かに二

人の部下を引連れ、河向ふの橋のたもとに立つて、死力を盡して敵軍を喰止めて居たが、多勢に無勢で、とても支へ切れぬ。

急いで橋を切落せ。我々三人がこゝを防いで居る。早く、早く。

と叫んで、三人は盾を弓手に、槍を馬手に、こゝを先途と防ぎ戦つて居る。こちらは急ぎに急いで橋を切つて、すはと言へば、すぐに落せる用意が出来た。

そら、落ちるぞく。早く返せ。急げ、返せ。

と後から聲を限りに呼ぶ。ホラチウスは早く歸れ。もう一人で防げる。急げ、急げ。

とせきたてて、二人を返して、唯一人矢表に立つた。二人がやつと橋を渡つたと思ふと、すさまじい響と共に橋は忽ちに落ちた。此の響を聞いて、ホラチウスは先づ羅馬は大丈夫だと安心した。猶も槍先をゆるめず防ぎ戦ひながら、一步々々に退つて、河岸に來たと思つた時、忽ちひらめく敵の一槍に左の眼を刺された。もう是迄と眞先に進んだ騎馬武者目がけて、手にした槍を投げつけ、重い鎧を着たまゝ、ざんぶと河に飛込んだ。敵も味方も驚いて、一齊に水の面を見て居ると、彼はしばらくして河の中流に浮上つた。最早敵の投槍も及ばない處に。そのまゝ、拔手を切つて、こなたの岸に泳ぎ着いた。羅馬

市民歡喜の聲は天地に響いた。彼方の岸でも聲を放つて歎稱した。

此の時一人のホラチウスが無かつたならば、世界最大の帝國となつた羅馬も、二葉の芽生で摘取られたかも知れなかつた。それから後、誰が言始めたともなく、獨眼ホラチウスの名は天下に響き渡つた。羅馬市民は此の愛國の英雄のために壯大な銅像を建てて、永く其の大都を飾つた。

ホラチウスの非凡の働で、一時羅馬は滅亡の悲運から救はれたけれども、ボルセナ王は必ず羅馬を滅さうと決心し、其の後十重二十重に羅馬を圍んだ。羅馬人は糧

食も次第に減少して、今は餓死するばかりになつた。こゝに又一人稀代の勇士が現れた。是はホラチウスと共に羅馬史上、一對の勇士として語り傳へられて居るムチウスである。ムチウスはボルセナ王を一忍ぐりにしてくれようと決心して、短劍を懷にして其の陣屋に忍び入つた。陣屋の内では一人立派な身なりの男が、並居る兵士に俸給を渡して居た。ムチウスはこゝぞと飛びかゝつて、其の男を刺通したが、仕損じたり、王ではなく、宗徒の一人であつた。刺客は忽ち捕縛されて、王の前へ引出された。いくら責められても白状せぬので、王は烈火のやうに

なつて怒つて、焼殺してしまへ。の下知の下に、火は忽ち用意された。ムチウスは

貴様等にいぢめられて、羅馬武士が苦しがると思ふか。先づこれから焼かせてやらう。

と言ひざま、右腕を烈火の中に差込んだ。腕はじりく燃出したが、ムチウスは自若として居る。流石の王も其の不敵に吞まれて、

免す、免す。もう焼くに及ばぬ。嗚呼、あつばれな勇士だ。歸れ、歸れ。敵ながらもお前のやうな勇士は殺すに忍びない。

鬼をもひしぐと見えたムチウスは忽ち形を改め、極め

て丁寧な態度に變つた。

陛下の寛大な御一言は身にしみて、烈火の責よりも苦しう存じます。御言葉にあまえて、命は頂戴して歸りますが、こゝに一言陛下の御爲に申上げて置きます。陛下の首を戴かうと決心した同志の者は三百人程もあります。私は其の先驅を試みて、運拙くてこんな目を見ました。今後ともゆめ々御油斷はなりませぬ。

ポルセナ王は、こんな決死の義士三百人に附けねらはれてはたまらないと思つて、自ら進んで羅馬と和議を締結し、圍を解いて去つた。是に於て羅馬の市民は始め

て枕を高くして眠ることが出来た。ムチウスは右腕一本失つて、左ムチウスの、あだな綽名は武士の手本を意味するやうになつた。

左の目一つと右の腕一本で、實に大羅馬帝國の礎は置かれたのである。

第十二課 新井白石

新井白石は徳川時代の有名なる學者なり。幼にして明敏、十歳の頃、君侯に侍して常に其の書翰を認むるに、殆ど老成人の如くなりきといふ。白石の父、事を以て祿を失ふに及び、其の家貧しきこと甚だし。然れども苦學息まず。江戸の富人河村瑞軒其の才を愛し、孫女を以て之

に妻せんとし、其の子をして白石に説かしめ、且三千兩の金を與へて、勤學の資に供せんといふ。白石辭して曰く、余聞く、昔澤上に小蛇あり。人其の腮おぼを傷つく。後大龍の此のあたりに死するものあり。是即ちさきに傷つける小蛇にして、其の創一尺に餘れりと。今大人の孫女を以て余に妻せんとするは小蛇を傷ふなり。他日家を興すの日、其の創豈小ならんや。と。遂に聽かず。後大儒木下順庵に就きて學び、博覽達識を以て稱せらる。

年三十七、甲府に召されて徳川家宣の儒臣となり、待遇日にあつし。五代將軍綱吉薨じて子なく、家宣入りて將軍となるに及び、祿五百石を賜ひ、文學を以て殿中に出

仕し、事毎に意見を問はれ、建白する所用ひられざるなし。從五位下に敘せられ、筑後守に任ぜらる。學術を以て此の榮爵を受けたるは時人の異數とせる所なり。白石の著書三百餘種、法制、經濟、歴史、文學、語學等各方面に互りて、いづれも識見の非凡なるを見る。歴史としては古史通、藩翰譜、讀史餘論等の名著あり。藩翰譜は全部十三卷、家宣の命によりて執筆せしものにして、七月筆を起して十月稿成る。其の文才想ふべし。白石の詩は雅馴にして誦すべく、詩集の出版せらるゝや、四方争ひて之を購ひ、支那人、朝鮮人にも傳唱せられたりといふ。自家の傳記を記せしものに、折焚柴たぐしほの記あり。行文流麗に

して、亦國文の模範たり。

第十三課 贈物

吉凶禍福につけて、物を贈りて慶弔の意を表するは、古來何れの國にも行はるゝ風習にして、他人の喜を以て我が喜とし、他人の憂を以て我が憂とする美しき同情の心より出でたり。而して誕生、婚姻、葬祭等、各其の場合に依りて一定の慣習あり。此の慣習に違へる贈物は却つて之を受くるものの感情を害するものなり。故に第一贈るべき品物の選擇に注意すべきは勿論、包み方、水引の結び様、熨斗のしとの附け處に至るまで、一々法式に従ふべし。

歳暮・中元等に贈物をなすは恩を謝し勞に報ゆる心なるべし。かくの如き贈物は能く先方の用不用を考へ、用ひて便利なるものを贈るべし。我が家に有餘りて用なきが爲に之を贈るが如きは禮に非ず。雞卵を贈るに、甲の家より乙の家に贈り、更に丙の家に行き、丁の家に移り、轉々する間に、折の中なる雞卵の腐敗して用をなさざるに至ることありといふ。苦々しき限りなり。吳服・太物・菓子・ビール等の切手を贈物に用ふるは、隨時に現物と引換ふるを得るが故に、便利は則ち便利なれども、餘り實利に流れて、之を受くるものに不快の念を抱かしまむることあり。よく時と場合とを考ふべきなり。

人を訪問するに、手土産を携ふることあり。我が庭園に熟したる果物、我が村、我が町に産し、先方にて珍重するが如きものを、よき序なりとて持行く親切の心より出でたるものにて、是己の欲する所を人に施すなり。然るに此の事、何時しか一種の虚禮となり、何等の意味なきものを贈ることあり。甚だしきは手土産を携へずして人を訪問するを非禮の如く考ふるに至り、爲に親戚・故舊間の往來も自ら稀に、交情も亦うとくなり行くこと多し。旅行して土産を贈るも亦同じ。旅行せし地方の特有土産にして、其の地の記念となるべきもの、又は我が親族・知友等の平素最も愛好するものを異郷に求めて



之を贈るは温き友情を示す所以にして、最もゆかしきものなり。然れども土産物を贈らざれば禮を缺くものと心得、勉めて何物かを持歸るは、却つて人情に外るべし。

凡そ贈物をなすには、能く其の場合を考へ、場合に適合するものを選ぶべく、又我が身分を顧み、身分相應の物を贈るべし。場合に適合せず、身分不相應の贈物をなすは禮に非ず。親切の至情を缺ける贈物は初より之を贈らざるに如かず。

## 第十四課 會社

昔ハ商工業ヲ營ムモノ、多クハ孤立シテ、自己ノ財産ノ

ミヲ資本トセリ。然ルニ近年、交通運輸ノ機關發達シ、商工業ノ進歩スルニ隨ヒ、大資本ヲ集ムルノ必要起リ、多人数協力シ、資本ヲ合同シテ會社ヲ組織スルコト、盛行ハル、ニ至レリ。俗ニ銀行會社トイヘバ、銀行ト會社トハ別物ノ如ク見ユレドモ、銀行ニモ會社組織ノモノ多ク、個人ノ經營セルモノハ少シ。

會社ニハ、若シ負債ヲ生ジ、會社ノ全財産ヲ以テ其ノ債務ヲ皆濟スルコト能ハザルトキハ、各社員盡ク無限ノ責務ヲ負ヒ、連帶シテ之ガ辨濟ニ任ズルモノアリ。之ヲ無限責任會社トイフ。又會社ガ債務ヲ皆濟スルコト能ハザルコトアルモ、各社員ハ其ノ出資シタル財産ノ外、

又別ニ自己ノ財産ヲ投ジテ之ヲ辨濟スルノ責任ヲ有セザルモノアリ。之ヲ有限責任會社トイフ。我が國ノ會社ニ四種ノ別アリ。合名會社、合資會社、株式會社及ビ株式合資會社はナリ。

合名會社ハ無限責任社員ノミヲ以テ組織スルモノニシテ、全クノ無限責任會社ナリ。合資會社ハ無限責任社員ト有限責任社員トヲ以テ組織ス。此ノ二種ノ會社ハ少數ノ人ノ資本ヲ合同スルヲ目的トシ、親族又ハ知人同志ノミニテ組織スルモノ多シ。

株式會社ハ多人數ノ資本ヲ合同スルモノニシテ、全クノ有限責任會社ナリ。其ノ總資本ヲ少額ニ等分シ、其

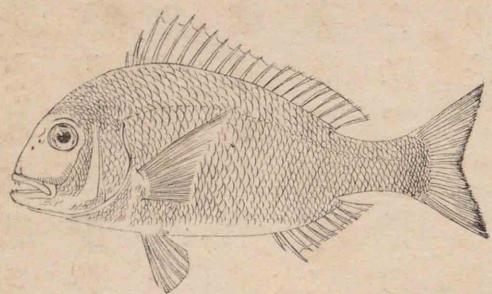
ノ一ヲ名ツケテ株式トイヒ、又略シテ株トモイフ。一株ノ金額ハ普通五拾圓ヲ下ラズ。而シテ其ノ出資者ヲ稱シテ株主トイフ。會社ハ株主ニ對シテ證書ヲ附與ス。其ノ證書ハ即チ株券ナリ。株主ハ其ノ株券ヲ他人ニ讓リ渡スコトヲ得ルガ故ニ、株式會社ノ出資者即チ株主ノ員數ハ常ニ一定セズトイフベシ。

株式合資會社ハ無限責任社員ト株主トヲ以テ之ヲ組織ス。恰モ株式會社ト合資會社トヲ合シタルガ如キモノナリ。此ノ種ノ會社ハ各國共ニ其ノ數甚ダ少シ。株式會社ニハ取締役、監査役アリ。之ヲ總稱シテ重役トイフ。取締役ハ主トシテ會社ノ業務ヲ處理シ、監査役ハ

業務ノ執行ニ就キ取締役ヲ監督ス。出資者ハ多數ニシテ、重役ハ少數ナリ。而シテ會社ノ盛衰ハ一ニ此ノ少數ナル重役ノ兩肩ニカ、レリ。若シ重役其ノ人ヲ得ザルトキハ、タゞニ其ノ出資者ニ多大ノ損失ヲ與フルノミナラズ、延イテハ世人ヲシテ他ノ會社ニ對シテモ不安ノ念ヲ抱カシメ、一般經濟界ニ危害ヲ及スコトアリ。故ニ重役ヲ選舉スルニハ、公平無私、能ク其ノ人物ト能力トヲ考フベク、重役タルモノモ亦正直誠實、會社ノ爲ニ一身ヲサ、グルノ覺悟ナカルベカラズ。

第十五課 我が國の水産業

我が國は千島の北端より臺灣の南端に至るまで延長

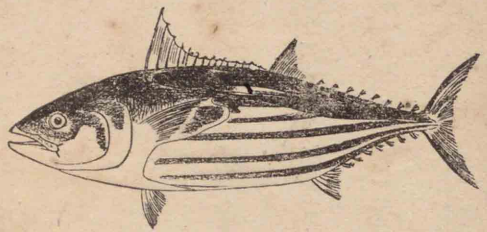


一千二百里。樺太及び朝鮮の沿岸を加へて、到る處好漁場あり。水産動植物の種類ノ多きこと、實に列國ノ第一位を占め、漁業者ノ多數なること亦世界に冠たり。魚類の中其の色澤の美



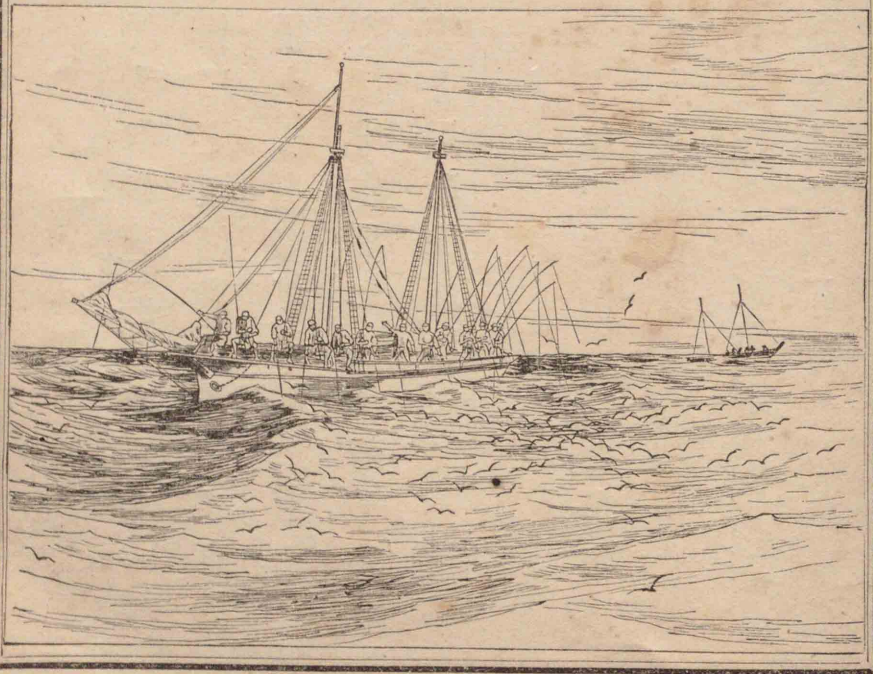
麗なると、風味の優越せるにより、古來高尚なる食膳魚として賞美せられ、祭儀、婚禮等に缺くべからざるものは鯛なり。全國の沿岸到る處之を産せざるはなし。通常は五六十尋の深處に棲息すれども、毎年四五月の交、産卵の時期に到れば、次第に淺處に群集す。之を漁獲するには各種の網を用ふ。一網能く數千尾を得ることありといふ。

鯉節を製する鯉も亦重要なる魚類の一にして、波浪高き海上の鯉釣こそ壯快にも亦雄々しけれ。一艘の小船に乗組む若者二十人餘り、長さ四尋ばかりなる太竿にて、投げたる餌に飛付く魚を引掛け、釣船の中に取



入るれば、  
魚は板子  
の上に飛  
びはね、鮮  
血潮と共  
に漁夫の  
衣服を紅

ならしむ。漁獲を終へて  
沖合よりウンニヤ・ハン  
ニヤの掛聲高く、濱邊を  
さして漕歸る勇ましさを

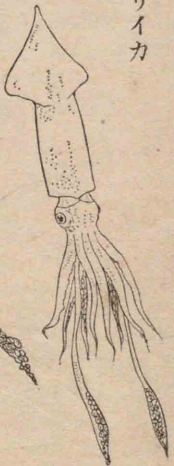


たとへんに物をなし。

南の琉球・臺灣に少く、北の樺太には産せざれども、一般に漁獵の多きは鰯なり。味佳にして價廉に、上下を通じての食料となり、多量の漁獲あるを以て、搾粕に製して肥料としても用ふ。従來多くは地曳網にて漁獲したれども、近年は揚繰網・巾着網等を用ひ、稍沖合にても漁獲するを得るに至れり。

清國へ輸出する水産物中の主位を占むるは柔魚より製する鰯なり。柔魚には數種あり。最も普通なるをすめるいかとす。本邦の沿海大抵之を産し、就中五島・隱岐・佐渡の島々及び北海道の渡島に産するを有名とす。夜行

ヤリイカ



スルメイカ



スミイカ

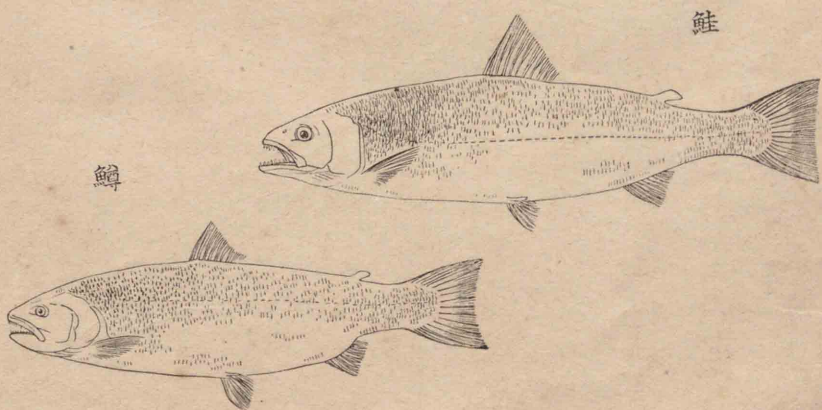


の動物なれば、晝間は六十尋の深處に潛めども、黄昏頃より水の上層に浮上りて餌を求む。故に漁夫は夜間篝火を燃し、又は石油燈を船舷に掛け、海波を照して之を捕ふ。

是等の外、鰯・鮪・鰯・鯖・鱈・鰈・明太魚等の漁獲亦多く、貝類には牡蠣・鮑等、海

草には昆布・石花菜等枚舉に暇あらず。

漁業と共に忘るべからざるは水産養殖の業とす。鯉魚を飼育するは信濃・大和等には舊くより行はれ、信州・鯉・大和・鯉の名あり。稻田に鯉魚を放養する方法の如きは農産と水産とを一舉に收得するものといふべし。又鰻・鱒等の稚魚を養魚池に放ちて飼育することも各處に行はる。殊に尾張・三河・遠江



武藏等に盛なり。鱒は好んで清冷なる水に棲息するを以て、我が國の如き溪流に富み、山湖少からざる國にては、飼育に適する場處甚だ多し。海産物中現今主として養殖せらるゝものは牡蠣と海苔となり。

凡そ漁業に於ては、みだりに産卵期の母魚又は稚魚を捕獲することを戒めざるべからず。鯛の稚魚は體側に數條の横紋ありて、海草多き處に棲息す。鰯の稚魚は體透明にして白魚の如し。是皆自然の保護色なり。是等の稚魚を捕獲して、目前の利のみを圖る漁民あるは歎かはしき事といふべし。又水流をさへぎりて用ふる漁具は、鮭・鱒・鮎など産卵の爲に河川を上下する魚族を滅盡

するに至るべし。

我が國の水産業は其の漁獵の方法に於て、又其の養殖の方法に於て、未だ十分に發達したりといふべからず。漁民の數に於てこそ遙に各國の上に位すれ、漁民一人の漁獲高に於ては尙頗る少額にして、英吉利・亞米利加等と比較すべくもあらず。是實に天與の巨利を遺棄するものに非ずして何ぞ。今日の如き不備なる方法を以てしても、我が國の水産物は全國民の需要を充し、尙對清貿易の重要品たることを失はず。若し能く學術を應用し、技術を磨き、漁獲に、養殖に、益改善の方法を怠らざらんか、其の利今日に幾倍すべきかを知らず。是豈國民

の一日も忘るべからざる所ならずや。

第十六課 村上義光

命の綱と頼みたる

吉野の城も今ははや、

嵐の前の花なれや、

つひに散るべきものならば、

いで潔く散らばやと、

宮は覺悟をきめ給ふ。

主從併せて幾十騎、

雲霞の如き敵中へ、

命投棄て切入れば、  
敵はこらへず追立てられ、  
谷間々々へ逃下る、  
風に木の葉の散る如く。  
さもあれ敵には新手あり、  
入代りまた寄せ來るを、  
長く防がんすべもなし。  
藏王堂の大庭に、  
宮一同を集めさせ、  
最後の酒宴を張らせらる。

かゝる折しもかけつくる  
村上彦四郎義光、  
痛手そこばく負ひながら、  
宮の御前にひざまづき、  
「はや、事急なり。恐れながら、  
御名を冒して我死なん。  
畏けれども、御鎧、  
御直垂も賜はらん。  
早くくと勸むれど、



いかでさること。忠臣を  
一人残して落ちんや。と、  
聽入れ給ふけしきなし。

義光大きに氣をいらち、  
國の安危を一身に  
になふ御身ぞ。むざくと  
こゝにて御最期あるべしや。  
とく落ち給へ。といひつゝも、  
御物の具のひもを解く。

宮げにもとや思しけん、  
物の具手ばやく脱がせられ、  
我若し生きて世にあらば、  
汝が後を弔はん。  
死なば後世にて逢ふべし。と、  
涙ながらに落ちたまふ。

御影遠くなりし頃、  
宮の召物身に着けて、  
やぐらに現れ大音聲、  
大塔の宮は我なるぞ。

最期の様を見置けや」と、  
腹かき切つてぞ失せにける。

すはや宮には御自害ぞ。

御しるし得ん」と敵兵ばら、

圍亂して集ひよる

騒ぎにまぎれ、つゝがなく、

宮は吉野の山越に、

天の川へぞ落ち給ふ。

第十七課 スエズ運河

スエズ運河は紅海と地中海との間を隔つる地峽を掘

割りたるものにして、南はスエズ灣より北はポートサ  
イド港まで、四箇の天然湖を連ねて、延長凡そ四十里、幅  
百尺、深さ三十三尺ありて、吃水深き船艦も能く通過す  
ることを得。

此の運河の開通せざりし以前は東西の交通甚だ不便  
にして、歐羅巴より印度地方に至る船舶は、すべて亞弗  
利加の南端喜望岬を迂回したりしなり。此の運河一度  
掘割られて、紅海と地中海との水相通ぜしより、印度洋  
大西洋間の捷路開け、四海比隣の如くなるに至れり。此  
の大工事を成就せしものは佛蘭西人フェルヂナン、ド、レ  
セップスにして、其の偉業と英名とは千古朽つること無

かるべし。

レセップスの計畫に先だち、佛蘭西皇帝ナポレオン一世の埃及を征服せし時、此の地峽を掘割らんことを企て、土木技師をして測量せしめしに、紅海の水面は地中海の水面より三十餘尺高ければ、其の功なからんとの事にて、其の計畫を廢せしなり。レセップスは後其の測量の誤れることを知り、十分の設計を立てて之を成就せんとし、埃及副王サイドパシャに謀りしに、副王も決心する所あり。如何なる故障ありとも此の企を果すべしと言へり。

英國は政治上の關係より、此の計畫に對して不同意を

唱へしを以て、レセップスは自ら英國に行きて遊説頗る力め、二年の後始めて其の同意を得たり。こゝに又其の資本を集むるに就きても、非常なる困難に遇ひしかども、レセップスの熱誠は諸人を動かし、遂に埃及・佛國等の援助を得、他の諸國も亦出金することとなりて、其の事業やうやく緒に就くに至れり。

さていよいよ工事に着手せしが、其の進行容易ならず。各國或は其の遲緩なるを責め、或は其の事業の成否を疑ひてやまず。掘割る所の地多くは沙漠にして、炎熱焼くが如くなれば、二萬餘の役夫は日夜勞苦を訴ふるのと甚だし。且最初は飲料水を運ぶに、日々千六百頭の駱



駝を使役する程なりしかば、費用意外にかさみて、遂に資本の不足を生ずるに至れり。レセプスの心勞如何ばかりなりけん。

然れどもレセプスは能く是等の困難に耐へ、愈、勉強して工事を監督し、事業次第に歩を進めしかば、さきの非難の聲も跡を絶ち、資本も次第に集りて、さしもの大工事も全く成就するに至れり。時は西曆一千八百六十九年なりき。始めて此の工事に着手してより年を重ねること十一、

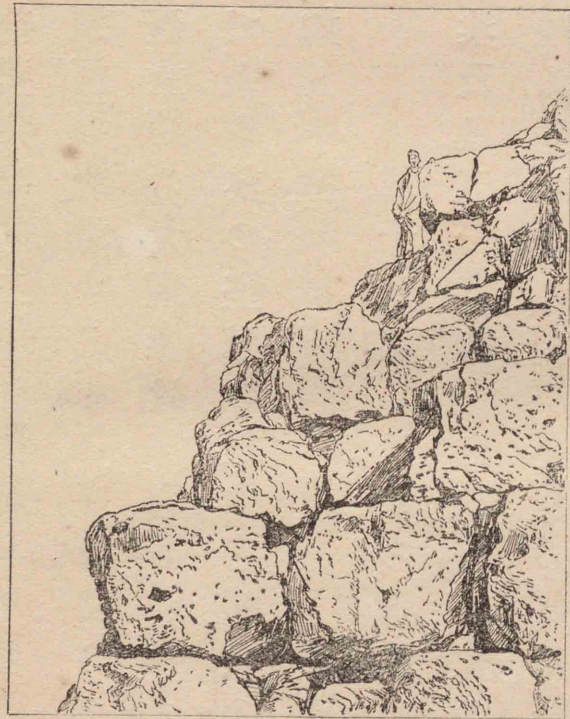
總費用は約二億圓に達せりといふ。運河の北端なるポートサイドの港口、地中海に面して直立せる大銅像は即ちレセプス其の人の記念像にして、永く其の堅忍の雄志と絶大の功績とを語るもの如し。

第十八課 埃及の遺蹟

埃及は五千年の昔に於て文化の發達夙に著しく、國勢頗る盛なりしが、屢、外國の侵略を蒙りて、興亡幾變遷、當時の都市は悉く荒廢に歸したり。然れども今尙沙漠の間に存する遺蹟を見れば、其の規模の宏大なる、實に人目を驚かしむるに足る。今其の最も著名なるものの二

三を記さん。

埃及國現時の首府カイロ市の附近に至れば、處々に雲を凌ぎて聳ゆる三角塔を見るべし。是即ち有名なるピ

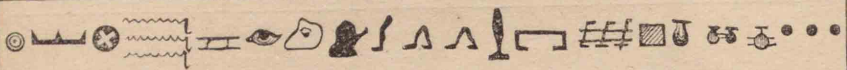
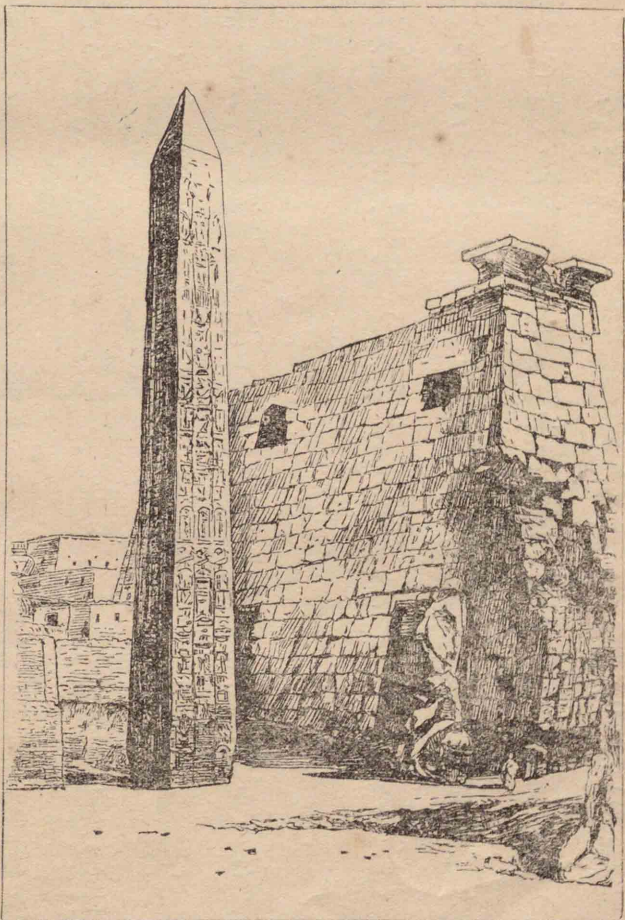


ラミッドなり。いづれも巨石を積重ねて造りたるものにして、如何にして之を積上げたるかは、今日尙建築學者の疑問とする所なり。其の最も壯大なるものは高さ七十七間、

底面の一邊長さ各百二十四間、敷坪一萬五千三百七十六坪の廣きに達せり。此の巨大なる塔を建つるには、毎年三箇月間十萬人の人夫を使役して、三十年餘の長年月を要したるならんといへり。ピラミッドは國王及び王族の墳墓にして、内部に室房あり、壯大なる石棺を安置せり。此の石棺中には數千年の星霜を経て尙朽ちざるミイラあり。

オベリスクは宮殿寺院等の門前に建てたる石碑なり。細長なる四角柱にして、其の上部は尖端に終れり。高きものは三十間を超え、低きも尙十間を下らず。皆一本の石にして、多くは花崗石を用ひ、鏡の如く磨きたる側面

には埃及特有の文字を彫刻せり。すべて國家の大事、英雄の偉績等を傳ふる記念として建設せるものなるを以て、埃及太古の歴史を研究するに最も必要なるものなりとす。



埃及文字の研究は早くより試みられたれども、十分に讀解くこと能はざりしが、西曆一千七百九十九年、ロセッタ石として、三様の文字にて彫刻せるものを發見せしに、其の一は即ち希臘文字なりしを以て、之と對照して始めて讀得るに至れり。體と四肢とは獅子を象どり、頭部のみ人の形を具へたる異様なる大石像あり。之をスフィンクスと稱す。其の大なるものは頭部のみにても三十尺に及べり。一對宛相向ひて二列に相並べるを常とす。蓋し宮殿寺院墳墓等の裝飾物なるべし。



大ピラミッドの近傍にあるもの殊に雄大なり。遠くより之を望めば、大廈の聳えたるが如し。是等のスフィンクス中には大風に吹揚げられたる沙中に埋没して、今は唯頭部のみ現れたるものあり。其の頭部も戦亂に際し、砲彈に破られて半面を失ひたるものあり。

第十九課 文字

文字は文明の要具なり。文字無ければ、廣く思想を世間に通じ、永く之を後世に傳ふること能はず。我等が前代の事蹟を究め、現時の世態を悟り、又更に之を後人に傳ふるは、一に文字の賜なり。文明の時代を逐うて進歩するは、文字の功其の半に過ぐといふべし。  
 太古人は繩を結びて約束のしるしとせしことあり。今も野蠻人の中には樹枝を切りて種々の長さとし、通信備忘の用に供するものあり。此の時未だ文字なし。思想を書記する符號にして、多數の人の承認を経るに及びて、始めてこゝに文字あり。最も早く發明せられたるは

漢字・埃及文字にして、何れも物に象どりて作れり。現今世界に行はるゝ諸種の文字は皆此の二種の文字の發達變化したるものとす。

漢字には日・月・山・水・魚・鳥の如く、物に象どりて作りたるあり。木の上下に一點を附して、本末の意義を寓せるものあり。木を二つ合せて林とし、三つ合せて森とし、目を木に懸けて東とせるが如きものあり。其の構造種々なり。

青の字に三水・日・米・金・魚の扁へんを加ふれば、清・晴・精・鯖鯖となり。曼の字に三水・扁・立・心・扁・草・冠・魚・扁・金・扁を加ふれば、漫・慢・蔓・鰻・鰻鰻となる。是等の文字は扁・冠を附加して各特

殊の意義を示せども、元の音の失はるゝことなし。漢字の數は時代と共に増加し、今は五萬以上あり。其の字書は扁・冠・旁ぼう等によりて漢字を分類し、尙之を字畫の數によりて排列せり。

我が國早くより支那と交通し、古くは漢字のみを以て一切の事を記せしが、後假名文字を製作して漢字と併せ用ふるに至れり。片假名は漢字の一部分を割きて作れるもの、平假名は漢字の草體より發達せるものなり。今日我等の用ふる漢字は其の形次第に變化して、其の象どれる物體の何物なるかを辨知し難きもの多し。埃及文字は其の後甚だしき發達を見ざりしを以て、終に



A B C D E F G H I J K L M  
N O P Q R S T U V W X Y Z

a b c d e f g h i j k l m  
n o p q r s t u v w x y z

A B C D E F G H I J  
K L M N O P Q R S  
T U V W X Y Z

a b c d e f g h i j k l m  
n o p q r s t u v w x y z

繪畫の域を脱せずしてやめり。現今歐米諸國に用ふる羅馬字は埃及文字より變化したるものなり。漢字、埃及文字の如きは物の形を象どりたる文字なれば象形文字といひ、又一字一義を表すを以て意字ともいふ。我が國の假名及び羅馬字の如きは音を表す文字なるを以て、音標文字又は音字ともいふ。

第二十課 雪

「夏蟲氷を知らず」といふ語もあるやうに、熱國の住民は玉屑紛々の美觀を知らない。空が薄墨色に曇つて、底冷がすると思ふ中、いつか篩ふるでふるつたやうな細かな白い片々が落初める。見る中に天地一白、葉一つも無い冬

木立も、常磐木の林も、眞白に綿をかけたやうになる。富人の金殿・玉樓も、貧家の藁屋根も、差別なく同一の色に埋められる。むさくるしいごみ溜も、きたないどぶ板も、皆一様に其の醜をおほはれる。路上の泥も隠れて、人の足跡、車のわだちが残るか、とすれば、又忽ちに降埋められる。路行く人は鶴の毛衣を着て往來すると、昔の詩人は見立てた。初雪を喜ぶものは犬の子ばかりでは無い。雪やこんこ。と歌ふ子供ばかりでは無い。薪炭に乏しい貧家でも、雪の美景を歎賞せずには居られぬ。花の美は地上の一部分に止るが、雪の美は天地を一つに包んだ壯觀である。多くの草花の枯果てた時節、自然は又此の

壯觀を與へて、我等の心目を一新するのであらう。雪の景色は水邊山間どことして面白くない處はない。何を釣る沖の小舟ぞ笠の雪。 召 波  
は水上の風光。

長々と川一筋や雪の原。 凡 兆  
見渡す限り野山は雪になつて、川ばかりを埋め残した景色である。

松原に飛脚小さし雪の暮。 一 晶  
街道往還のとだえたさびしさを思へば、  
箱根越す人もあるらし今朝の雪。 芭 蕉  
宿貸せと刀投出す吹雪かな。 蕪 村

雪中の山路の困難は一層思ひやられる。

狼の聲揃ふなり雪の暮。

丈草

荒熊のかけ散してや笹の雪。

北枝

深山の荒涼な景色身にしむ心地がする。

戸にさはる音も静けし夜の雪。

如洋

鶏の音の隣も遠し夜の雪。

支考

といふやうに夜中降通して降積つた幾尺の雪、朝の眺の美しさよ。いつか朝日がかゝやき渡つて、

美しき日和になりぬ雪の上。

太祇

第二十一課 ビクトリヤ女帝

英國の女帝ビクトリヤの生れしは西曆一千八百十九

年にして、汽船の始めて大西洋を横ぎりし年なり。一千八百三十七年、十九の花の盛りにして皇位に登り、一千九百一年、八十三の高齡にて崩御せるまで、其の治世六十五年間は英國の國運、旭日昇天の勢を以て發展し、遂に前古未曾有の隆昌を極めたる時代なりき。

ワーテルローの戦争に於て、ナポレオンの一敗地に塗れしは女帝降誕の年に先だつ四年にして、國民の冒險と勇敢と勤勉と忍耐とを以てして數百年の間に廣大なる領地を拓きたる英國は今や一躍して歐羅巴の最強國となれり。ビクトリヤ女帝は生れながらにして、此の強國を統治するの幸運を得たり。又第十八世紀の終



多く發明し又最も多く利用したるは英國人にして、英國は女帝の治世に於て、世界商工業の覇權を握るに至りしなり。

より第十九世紀に互りては、蒸氣電氣を利用したる大機械の發明頻々として起り、商工業の情態全く一變せしが、是等の機械を最も

凡そ時代の形勢を察し、之を善用利導するは明君賢相の任務なり。女帝ビクトリヤは十九の處女を以て此の大任に當り、施政の方針一として時宜に合はざるはなく、あつばれ明君の譽を四海に専らにせしは、誠に其の英明なる天資と國利民福を思ふの至誠とに依らずんばあらず。女帝は常に其の天與の大任を重んじ、寸時も國政を忘れず、大小の政務、一々其の利害得失を究むるに非ざれば、裁可を與ふることなし。彼の外交事件の最も紛雜を極めたりし一千八百四十八年の如きは、二萬八千通の外交文書を一々閲覽したりといふ。或時首相某、法律案の裁可を請はんとて、此は極めて便

利なる法案なり。」と奏上せしに、女帝は之を聽きて、朕は是と非とを判別せんのみ。便不便は知るを要せず。」とて之を却け、又嘗て勅令案に署名を求めんとて、本案は極めて緊要なれば、速に裁可を仰ぎたし。」と請ひしに、女帝は「此の勅令案も緊要なるべし。然れども署名に先んじて、案の正否を考究するも、亦極めて緊要の事ならずや。」といへり。

女帝は溫容玉の如き中に侵すべからざる威嚴を具へ、貞淑にして慈愛の心厚く、常識に富みて能く下情に通じ、文學・音樂の造詣淺からず。又數箇國の國語に熟達し、印度語をさへ學べり。女帝は明君として一代に仰がれ

たるのみならず、又妻としても、母としても、婦人の模範とするに足れり。

一千八百四十年、齡二十二にして獨逸サクセ、コーブルグ國のアルバート公を迎へて皇婿となし、四人の皇子と五人の皇女とを擧ぐ。第一は皇女にして、獨逸帝フリードリヒ一世の皇后、即ち現皇帝の母。第二は皇子にして、英國の皇位を嗣ぐ。先帝エドワード七世是なり。其の他の皇子、皇女何れも王公の家を保ち、皇室の繁榮、國家の隆盛と相伴なへるは、誠に多幸多福なる生涯といふべし。

唯一の不幸は一千八百六十一年、皇婿アルバート公の

四十一の壯齡を以て世を去りし事にて、盈つれば虧くる世の習は女帝の身にも免れ得ざりしなり。

## 第二十二課 待賢門の戦

左衛門佐重盛、討手の大將を承つて言ふやう、年號は平治なり。都は平安なり。我等は平氏なり。三事相應ぜり。敵を平げんこと、何の疑かあるべき。誰かこゝに樊噲、張良が勇を爲さざらん。と、三千餘騎を三手に分け、陽明待賢、郁芳の三門に押寄せたり。源氏方には三門をさし堅めて、大庭に馬ども多く引立て、用意をさく、怠なし。

重盛は手兵五百餘騎を率ゐて、信賴が守れる待賢門に向ひ、大音聲に呼ばはりけるは、此の門の大將軍を信賴

卿と見るはひが目か。かく申すは桓武天皇の後裔、太宰大貳清盛が嫡男、左衛門佐重盛、生年二十三。と名乗りかくるに、臆病なる信賴返事にも及ばず、それ防げ、侍ども。とて引退く。大將退却すれば、防ぐ兵一人もなし。我先にと逃行けば、重盛いよく勇みて、大庭の椋の木の下まで攻めつけたり。義朝之を見て、悪源太は無きか。信賴といふ大臆病人が待賢門を破られつるぞや。あれ追出せ。と呼ばはる。聲の下より悪源太義平、承り候。とて駈出でたり。續く兵には鎌田兵衛、後藤兵衛、佐佐木源三、波多野次郎、三浦荒次郎、須藤刑部長井、別當岡部六彌、太猪俣小平六、熊谷次郎、平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上總介

八郎・關次郎・片桐小八郎大夫、以上十七騎くつばみを並べて馳向ふ。

悪源太義平大音聲を上げて、此の手の大將軍は誰人ぞ。名乗れ、聞かん。かく申すは清和天皇九代の後裔、左馬頭義朝の嫡子、鎌倉の悪源太義平。生年十五歳の初陣より度々の合戦に、一度も不覺の名を取らず、年積りて十九歳。見參せん。とて、五百騎の其の中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、縦横十文字に敵を蹴ちらして、葉武者どもには目なかけそ。大將軍と組んで討て。といふく、左近の櫻、右近の橘を七八度追廻して、組まんく、とぞもみたりける。十七騎にかけ立てら

れて、平家の五百騎はかなはじと引退く。

重盛弓杖ついて馬の息をつぐ所に、筑後守家貞あつはれ、平將軍の再來かな。と譽むるを聞きて、今一度駈けて家貞に見せんとや思ひけん、更に新手の五百騎を引具して、復掠の木の下まで攻寄す。悪源太かけ向ひ、兵は皆新手なれども、大將は重盛なり。此の度こそは討ちもらすな。と下知すれば、勇み立つたる十七騎、我先にと進み出づ。悪源太弓を小脇にかいばさみ、鎧踏張り突立ち上り、左右の手を舉げ、我も源氏の嫡男なり。御邊も平氏の嫡男なり。よき敵ぞ。寄れや、組まん。といふまゝに、先の如く掠の木の下を追廻して、五六度までもみたりけり。

重盛復もかなはじと門を出でて引退く。悪源太二度までも敵を追ひまくり、しばし馬に息つがするを、義朝遙に見て、汝が不覺に防げばこそ、敵は度々駈入るなれ。あれ追出せ。といひやれば、義平聞きもあへず、承り候ふ。進めや、者ども。と、十七騎共に討つて出で、敵五百騎が間へ面もふらず割つて入る。浮足立つたる平家勢、馬の足を立てかねて逃行く様ぞ見苦しき。義朝之を見て、我が子ながらも義平はよく駈けたるものかな。あゝ、駈けたり。とぞ譽めたりける。

第二十三課 地震

地下ノ大鯰ガ頭尾ヲ振ハセテ地ノ動搖ヲ起ストノ俗

説ハ、今ハ何人モ信ズルモノ無カルベシ。地震ハ不思議ナル災異ノ如クニ見ユレドモ、一ノ自然的現象ニシテ、時ノ分布、地理上ノ關係等、簡單ナル規則ニ支配セララルコト少シトセズ。

地震ノ原因ニハ種々アレドモ、要スルニ地殻中ニ過大ノ壓迫ヲ受クル弱キ部分アリ、時ヲ經ルニ隨ヒ、次第ニ歪ヲ増シテ、遂ニ變動ヲ起スニ在リ。基本的原因ハ(甲)地殻ノ冷却ニ伴ナフ收縮、(乙)地球面上ニ於ケル物質ノ移動、即チ風水ノ作用ニ依ル土砂ノ移動等ナリ。

大地震ノ直接原因ハ地殻内ニ急ニ陷落、喰違、挫折、壓縮、裂罅等ヲ生ズルニ在リ。就中陷落ト喰違トハ多少相混



ジテ發スルヲ常トス。所謂斷層ヲ成スモノニシテ、實際ニ是等ノ變動ヲ地表面ニ露出スル場合モ稀ナラズ。斷層ノ爲ニ起レル地震ノ起震地、即チ震原ハ往々長距離ニ互ルコトアリ。明治二十四年ノ濃尾地震、同三十九年ノ米國サンフランシスコ地震等ハ此ノ種ノ適例ニシテ、震原地ノ長サハ前者ハ約二十五里、後者ハ百十里ナリキ。

火山ノ破裂スルトキハ、其ノ勢力ノ一部分、四圍ノ地ニ激動ヲ與ヘ、地震ヲ生ズレドモ、其ノ震動ハ極メテ微ニシテ、震域モ噴口ヨリ十里内外ノ距離ニ止ル。之ニ反シテ爆裂ニ伴ナヘル空氣ノ波動ハ百里餘ノ遠距離ニモ

達シテ、家屋ヲ振動セシムルコトアリ。寶永四年富士山ノ破裂、明治四十二年淺間山ノ破裂等はナリ。又火山ノ破裂セントスル數日前ヨリ許多ノ地震ヲ發スルコトアリ。大地震ニハアラザレドモ、粗造ノ構造物ハ時トシテ多少ノ損害ヲ免レズ。明治四十三年ノ有珠山噴火ニ先ダテル地震ノ如キ是ナリ。大地震ト噴火トハ必ズシモ原因結果ノ關係ナケレドモ、兩種ノ現象ガ殆ド同時期ニ發起スルコト稀ナラズ。

一地方ニテ大地震ノ將ニ起ラントスルノ時期ニ達スレバ、震原地附近ノ地殼ハ危殆ノ状態ニアルヲ以テ、地球面上ニ影響スル外力ニ感ズルコト鋭敏ナルベシ。外

カトハ大氣ノ壓力、雨雪量等ノ謂ニシテ、地震ノ副因ト稱スベキモノナリ。地震ト天氣トハ關係アレドモ、普通ニイヘル如ク、蒸暑キ日ニ地震多シト、イフハ事實ナラズ。大地震ハ多クハ快晴無風ノ日ニ發シ、天氣險惡ニシテ風激シキ際ニ起リシ例ナシ。

地震ハ地下ニ存スル弱點ヲ除去スルモノナレバ、大地震ノ起リタル後ニハ、同一中心地ヨリ更ニ大震ヲ發スベキ理由無シ。俗ニ所謂搖返シト稱スルハ大震後ニ續キ起ル小震動ノ謂ニシテ、餘震ト名ヅクルヲ適當トス。餘震ハ時トシテハ夥シキ數ニ達スルモ、性質上危險ノモノニアラズシテ、餘震アルガ爲ニ地ハ再ビ安定ノ狀

況ニ歸スルヲ得ルナリ。

地震動ノ強弱ハ地震ノ大小ト震原ノ遠近トニ依リテ異ナレドモ、地形ニ關スルコトモ少カラズ。斷崖・河岸等ハ常ニ震動ヲ増大スルノ因ヲナス。又岩石若シクハ堅硬ナル赤土ノ地區ニテハ震動著シク輕ケレドモ、新成地若シクハ埋立地ノ如キ土質ノ柔軟ナル場處ニテハ震動強ク、水及ビ泥砂ヲ噴出シ、地割ヲ生ズルコト稀ナラズ。昔ヨリノ言傳ヘニ、大地震ノ時ニ藪ノ中へ逃ルベシトテ、イタク地割ヲ恐ルレドモ、一度生ジタル地割ハ再ビ密閉スルモノニアラズ。且幅ハ廣クトモ深サ淺ケレバ、人畜家屋等ガ其ノ中ニ陷入シテ埋没スルガ如キ

危険無キモノトス。

震動ニハ上下動ト水平動トアリ。震原ノ近クニテハ上下動多ク、遠ザカルニ隨ヒ、次第ニ水平動トナル。家屋ニ甚ダシキ震害ヲ及スハ強キ水平動ナリトス。古來地中海ノ沿岸、南北亞米利加ノ太平洋沿岸等ニテ、非常ノ慘狀ヲ呈シタル大震少カラズ。就中明治四十一年十二月ノ伊太利國メシナ大地震ハ約十一萬ノ死者ヲ出セルガ、此ノ如ク死者ノ多カリシハ全ク家屋ノ建築ニ基ツケルモノニシテ、若シ日本ノ都市ニ同一程度ノ地震アリタリトセンカ、死者ノ數ハ其ノ四百分ノ一二モ達セザリシナラン。

日本ニテハ地震甚ダ多ク、破壊的地震ハ二年半ニ一回アル割合ニシテ、激烈ナル大震モ稀ナラザレドモ、家屋ハ輕キ木造ナルヲ以テ、死傷者ハ割合ニ少シ。將來如何ナル大地震アリトモ、西洋ノ都市ニ於ケルガ如キ多數ノ死者ヲ生ズルコトハ無カルベク、有名ナル安政二年ノ江戸大地震ノ時ノ死者ハ約七千人、明治二十四年ノ濃尾大地震ノ死者モ同ジク約七千人ニシテ、全潰住家毎十一戸ニツキ一人ノ死者ヲ出セル割合ヲ示セリ。

### 第二十四課 ビスマークの幼時

獨逸帝國建設の大政治家として英名世界にかくれなきオットー、ファン、ビスマークは、獨逸の片田舎なる貴族の

家に生れたり。其の家庭は頗る嚴格にして、幼き頃より決して他の貴族の子弟の如き優長なる生活を許されざりき。六歳の時、母は彼を國都伯林に送りて、某博士の家塾に入學せしめしが、其の家塾の教育は全くスバルタ流にして、過激なるまでに體育を施せり。塾生は毎朝六時に起床し、七時には教場に入らざるべからず。朝食はもとより晝食、夕食いづれも粗末なるもののみなり。加之我が膳に供へられたる食物を餘す時には、他人の食終るまでは皿をさゝげて卓前に立たざるべからずといふ制裁ありき。嚴格なる家庭に成長せりとは聞きしかど、貴族の子にて、僅かに六歳の幼童なれば、塾長は

ビスマークの果して之に堪へ得るか否かを疑ひしが、彼は誠實に師の命令を守り、年長故參の友と相伍して、よく塾生たるの本分を盡せり。

いつしか夏となりぬ。游泳の始るべき時は來れり。總べて新しき生徒は一度教師より水中に投入られ、河の中には亦多くの塾生ありて、之を苦しめ、水に慣れしむるを例とせり。今しも游泳處と定められたる河の兩岸には、塾生と教師と相並びて立てり。教師はビスマークを捕へて水中に投ぜり。不敵なる小童は深く水中に沈みて、其の影を示さざりしが、しばらくして前岸近く現れ、平然として岸に上れり。人々相顧みて語なく、皆其の

大膽なるに驚けりとか。是よりビスマークの名塾中に高く、彼は遂に一方の首領として仰がるゝに至れり。粗暴にして體力強きものは多くは學業に拙きものなれども、ビスマークは教場に入りても、其の明敏なること往々等輩を凌ぎ、教師をして感歎せしめたり。殊に世界歴史を好み、希臘・羅馬の古英雄の傳記は最も其の愛讀せしものにして、孤燈の下、獨り史書に對して種々の空想にふけり、夜の更くるをも知らざりしこと屢なりきといふ。

十二歳の時中學に轉じ、こゝにて學士ボンネルといふ歴史科教師の信用を博し、朝に夕に其の居を訪ひて、一

層深く歴史の研究に心を委ね、平生の粗暴なるに似ず、書を読みては常に寢食を忘れたり。思へば是誠に彼が一世の偉業を大成せし基にして、事に當りて裁決流るるが如く、奇策縦横にして用意の周到なる、皆是少壯時勉學の賜なりといはざるべからず。世に天賦の才といふことなきにあらざれども、磨かざば玉も瓦石に等しからん。ビスマークが常人に超えたる才能を以て、尙刻苦勉勵して讀書に熱中せし一事は、我等の深く鑑みるべきことにあらずや。

普國の首相として、奧地利と戦端を開き、僅かに十餘日にして城下の盟をなさしめ、勳威赫々として伯林に還

るや、舊師ボンネルは當時伯林の或中學の校長なりしが、此の報に接して歡喜に堪へず、直ちにビスマークを訪ひ、辭を改めて其の偉勳を稱揚し、閣下よ、余は閣下が曾て其の愛讀せられたる世界歴史の中に、今日は自ら壯絶なる一節を記入せられたるを祝す。といへば、ビスマークは深く其の舊恩を謝し、靜かに答へて、否、先生稱揚の辭は我の敢て當る所にあらず。されど多年の素志こゝに遂げて、歴史研究の効果の空しからざりしを喜ぶ。といひたりとぞ。此の英雄を養成したる舊師の喜は如何。又其の素志を遂げしビスマークの愉快は如何。此の物語を聞く我等も心の躍るを禁ずる能はざるなり。

## 第二十五課 慈善

「天は人の上に人を造らず。人の下に人を造らず。」といへども、人の貧富ばかり千差萬別なるはなし。飽食暖衣、何不足なく一生を送るもあれば、日夜營々として尙生活に追はるゝもあり。諺に、上を見ても際限なく、下を見ても際限なし。といへり。我等が父母の慈愛によりて、學校に通ひ、教育を受け、楽しく生活するは、思へば何等の仕合ぞや。

貧富は大抵其の人の賢愚強弱に由るものにて、禍福二つながら自ら招くものなり。然れども不慮の災難の爲に父祖傳來の財産を失ひ、一朝にして不幸の境遇に沈

むもの、又最初より赤貧洗ふが如く、學ぶに途なく、營むに資なく、容易に世人の信用を得難きもの、年幼くして親に離れたる孤兒、齡更けて子に先だたれたる老人等、是等はいづれも悲しむべき運命の手に翻弄せられて、人力の之を如何ともすべからざるものなり。是等不幸なる人の窮狀に同情し、力の及ぶ限り救助を與へんとするは美しき人情にあらずや。孤兒院といひ、感化院といひ、慈惠病院といふの類、皆此の慈善心の發現に外ならず。

「長者の萬燈、貧女の一燈。」といへる如く、慈善の行は惠與する資財の多寡に依らず、一片同情の心を貴しとなす。

他人に勧誘せられて心ならずも義捐し、又は麗々しく自己の名を吹聴せんが爲に、身分不相應の寄附を爲すが如きは、慈善家に非ずして偽善者なり。慈善は貴ぶべく、偽善は卑しむべし。

世に惡むべきは、身體強健にして労働に堪へ得れども、怠惰にして職業に勤めず、徒らに慈善家の同情に依頼して、酒食の料を得んとするの輩なり。若し是等の徒を救助せんか、却つて其の依頼心を増長せしめ、不良の慣習を作らしむる恐なきに非ず。是等の人に向ひては、金錢物品を與ふるよりも、適當なる職業を授け、或は之を奨勵して、獨立心を起さしむるを可とす。更に又惡むべ

きは、往々窮困の人を救ふを名として、慈善家の資財を集め、獨り其の私腹を肥すものなり。是等は固より人面獸心の徒にして、沙汰の限りといふべし。

## 第二十六課 看護の心得

病を治するは醫藥と養生とに由れども、其の經過の良否と快癒の遲速とは看護の巧拙如何に關すること多し。

家族に病人の生じたる時は、直ちに醫を招きて診察を求むべし。醫を招きては腹藏なく其の容體を告ぐるを必要とす。又既に醫に託したる後は、萬事之に信賴して、其の指揮に従ふべし。醫は經過を豫察して投藥するも

のなり。素人目に經過面白からずとて、無斷に醫を換ふるが如きは、病者の身體を弄ぶものにして、却つて快癒を遅からしむることあり。他に立會醫を加へんと欲する時は、先づ其の旨を告げて、主治醫の承認を経べし。病者の臥室は閑靜にして通風採光の宜しきを得たる處たるべし。寢具衣服の類も務めて清潔にすべく、食物は調理方に注意して、病者の嗜好に適せしむべく、如何に要求すとも、醫の許さざるものは決して之を與ふべからず。腸窒扶私患者が快癒期に際して、ひそかに一枚の煎餅、一箇の果實を食ひ、爲に病勢變じて遂に一命を失ひたるが如きは、屢聞く所なり。



薬用には最も注意すべし。時刻及び分量等は正確に醫の命令を守るべく、内用劑、外用劑等多種を與へられたる時は、誤用せざる様注意すべし。體温は定時に之を検し、急激に昇降したる時は、直ちに醫の許に通知すべし。體温は人の體質、年齢等によりて異なれども、通常攝氏の三十六度半乃至三十七度を平温とす。四十度に昇るも、三十五度に降るも、等しく危険の情態なり。兩便は勿論其の他の汚物は醫に謀りて處置すべし。傳染病の如き最も然り。若し消毒不十分ならんか、病毒傳播して、恐るべき災害を幾多の人々に及さん。看護に従事する者の片時も忘るべからざることとは患

者の精神に慰安を與ふること。是なり。病者は身體の衰弱すると共に神經益、過敏となり、聊かの事にも感動して喜怒哀樂の情を發し易く、周圍の状態、醫及び看護者の舉動等によりて、刺激を受くること多く、随つて病勢に影響すること少からず。たとひ懇意の間柄なりとも、醫の禁ある時は面會を謝絶すべし。患者の無聊を慰せんが爲に談話、讀書等を爲すにも、務めて患者の精神を刺激するものを避くべく、戸障子の開閉、物品の取片付等にも靜肅を旨とすべし。多人數病床の傍に集りて高声に談笑するが如きは最も慎むべきことなり。然れども低聲に私語するも亦宜しからず。病者をして自己の

病勢又は自己に關する密談なるが如くに思はしめて、不安不快の念を抱かしむべき恐あればなり。婦人は萬事に綿密にして、同情の念に富み、且其の言動溫和なれば、最も病人の看護に適せりといふべし。故に一家の主婦たるものは平素看護法の大要を心得、内に病人ある時、主として看護の任に當るの用意あるべきなり。

第二十七課 進取

一

人生の行路平坦ならず。  
波浪逆巻き、風雨荒し。

百折たわまぬ決心あれば、  
光明常に彼岸にひらめく。

二

正義の路を踏行く我が身、  
恐るべきもの世にまたあらず。  
困苦は我を奈何にともせず。  
艱難汝を玉にすと知れ。

三

百里の路を旅行くものは、  
九十里を以て半とすべし。  
九仞じんの山を築かんとする人、

功を一簣ひとすぢに虧かくこと勿なれ。

四

人を羨うらやみねたむは愚おろか。

彼も人なり、我も人なり。

一念こつては何成らざらん。

成らぬは努力の足らざる故ぞ。

五

運拙うんせつしとかこつを休めよ。

自ら助けて天亦助く。

唯人力の及ばん限り、

盡つくしくて斃あれてやまん。

第二十八課 征衣上途

動員令のあつた其の日から殆ど一箇月目、即ち明治三十七年五月二十一日、是ぞ生涯忘れることの出来ない嬉しい日であつた。

愈、戦地へ行かれることになつて見ると、半時も早く出發したいと、誰一人思はない者はなかつた。さて其の待ちに待つた出發の日は決定されて、午前六時城内練兵場に整列せよとの命令が下つた。

日頃の熱望こゝに達して、男兒の本懐之に過ぎるものはない。我等の歡喜は無む限であつたが、此の歡喜と共に又暗涙の浮ぶのを禁じ得なかつた。丈夫涙無なきに非あず。

離別の間にそゝがず。とか。無論今更戀々として、家を顧み親を慕ふのではないが、生きて再び還らぬ決心があればある程、是が親子兄弟今生の見納かと、鬼の目にも涙のたとへは免れ得なかつた。

出發の前夜、舊友の寫眞を出して見たり、机の中を片付けたり、死んだ後で留守の者に何一つ分らぬ事のないやうに、それ〴〵整頓してから、疊の上での最後の眠を求めようと寢床に就いた。

しばしまどろむと思ふ間もなく、柱時計は午前三時を報じた。すはとはね起き、冷水で身を清め、晴の征衣を着飾つて、宣戰の大詔を奉讀し、遙に大君います東の空を

伏拜み、次に之を最後と、祖先の靈前に禮拜したが、此の時は、汝は汝にして汝にあらず。陛下の御爲進んで難に赴け。未練なるふるまひして家名を汚すな。と誠められるやうな感じがした。さて家族一同、自分を圍んで別杯を舉げて、皆此のめでたい出陣を祝つてくれた。

後の事は少しも心配するに及ばぬ。思ふ存分に働け。あつばれな功名をして、家門の花を咲かせてくれ。私の事は決して御心配遊ばすな。武士の譽としてこんな嬉しい事は御座いませぬ。折角御體を御大切に遊ばせ。とはたゞに自分の家のみでなく、今日出征する人の殆ど總べての家々で、親子の繰返した悲壯の語であつたであ

らう。時は迫つた。自分は神前に備へておいた軍刀を腰に着け、勇みに勇んで我が家の門を後にした。

午前六時、聯隊は整列を終へ、軍旗は莊重な、足曳の曲の吹奏に迎へられて、朝風に翻つて居る。聯隊長は沈痛な音調を以て、故國を去るに臨みての最後の訓示を朗讀した。終ると其の發聲で、一同大元帥陛下の萬歳を三唱した。

第一大隊より前進。是進軍に臨んで聯隊長が部下に下した最初の號令であつた。我等は既に征露の途に上つたのである。一同血湧き肉躍るの思があつた。向ふ處は

天も裂くべし、地も碎くべし。

長蛇の如き我が聯隊は熱心誠意よりほどばしり出でたる國民の萬歳の聲に送られて、勇ましく前進した。次第に遠ざかる靴の音、蹄の響は、いかばかり國民の耳に頼もしく聞えたことであらう。遠く近く響き渡る喇叭の音は即ち親愛なる同胞に對する暇乞であつた。老も若きも手にく、國旗をふりかざして天地をとるかす萬歳の叫に對しては、我等は誓つて此の至誠に報いなければならぬとの感慨を深くした。其の後度々の戦鬪に、喊聲を揚げて敵壘に突撃する毎に、背後で國民の萬歳の聲が潮の如くに湧起るやうに感じた。我等の喊

聲は國民の萬歳の聲の反響に外ならぬのである。巨彈耳をかすめる戦場の朝にも、嚴寒骨を刺す露營の夕にも、決して忘れることの出来なかつたのは、國民が熱血をしぼつて叫んだ萬歳の聲であつた。

## 第二十九課 奉天附近の大會戰

露軍のクロパトキン大將は此の一舉を以て日本軍を破り、遼陽沙河敗戦の汚名を雪がんと欲し、奉天に根據を定め、戦鬪員約三十二萬、大砲約千四百門の大軍を左右に擁し、其の後方に備へたる部隊を合すれば、總員六十萬に及び、防備をさく／＼怠なく、援軍の到るを待ちて攻撃に移らんとす。我が軍の之に對する戦鬪員は約二

十六萬、大砲千餘門にして、連戦連勝の勢を以て、今度の一戦にこそ敵をして再び起つこと能はざらしめんと、大膽にして周密なる方略を定めて、戦機の熟するを待てり。

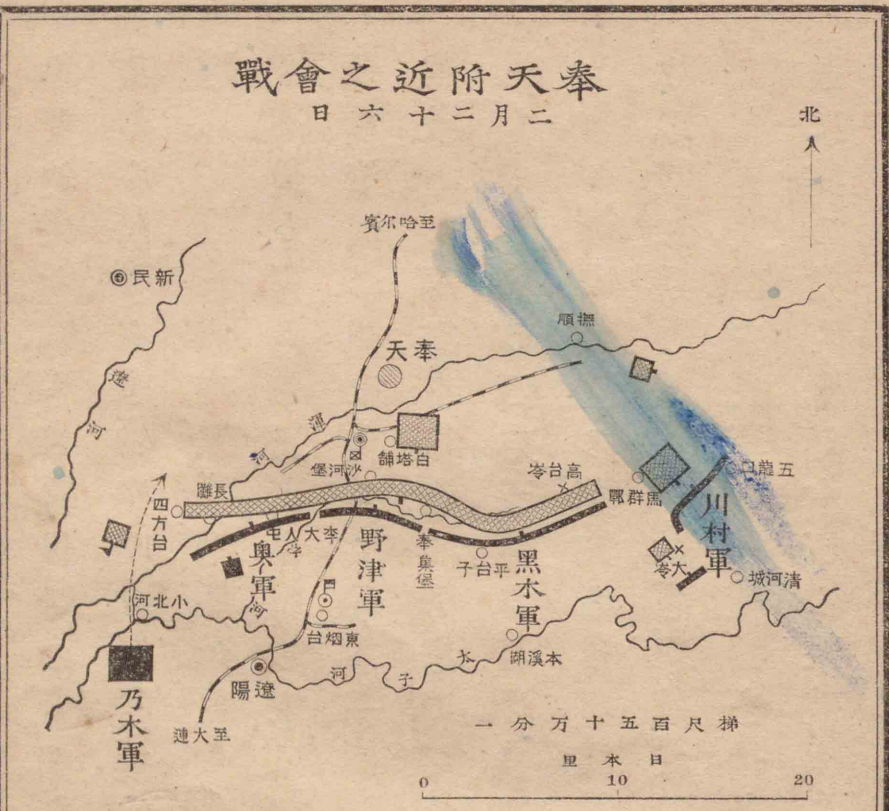
敵味方共に此の大兵を擁して近く相對し、東は清河城附近より西は遼河に至るまで、山に互り河を横ぎり、戦線四十里に及び、時は二月の末つ方、堅氷河水を鎖し、寒風膚をつんざくと雖も、勇氣勃勃たる我が軍の將校下士卒は日夜敵壘に對して肉躍り血湧けり。

私の作戦計畫は漸次に敵の兩翼に迫りて、其の退路を斷ち、以て決戦を強ひんとするに在り。川村大將は最右

翼軍を率ゐて撫順に向ひ、乃木大將の率ゐたる軍は最左翼に在りて、渾河・遼河の中間地域を迂回して奉天の西北に進み、黒木・野津・奥三大將の率ゐたる各軍は正面より兩翼軍に連り、全軍相依りて包圍の形を占め、敵を奉天附近に壓せんとす。

戦機は愈熟せり。明治三十八年二月二十三日、我が最右翼なる川村軍先づ活動を開始して清河城を抜き、進んで馬群鄂に迫り、又中央の各軍は沙河の陣地に在りて、徐に左右兩翼に於ける戦局の發展を待つ。初めクロパトキン大將は我が主力の中央に在るを認め、彼亦大軍を集めて之に當らしめ、且奥軍の左翼を攻撃して、漸次

奉天附近之會戰  
二月二十六日



中央に及さんとし、既に二月二十五日を期して發動せんと企畫せり。然るに我が右翼軍の活動頗る猛烈なるを見るや、嚮に旅順より北進せし乃木大將の精銳此の方面に向へりと信じ、急ぎ其の手裡及び西方

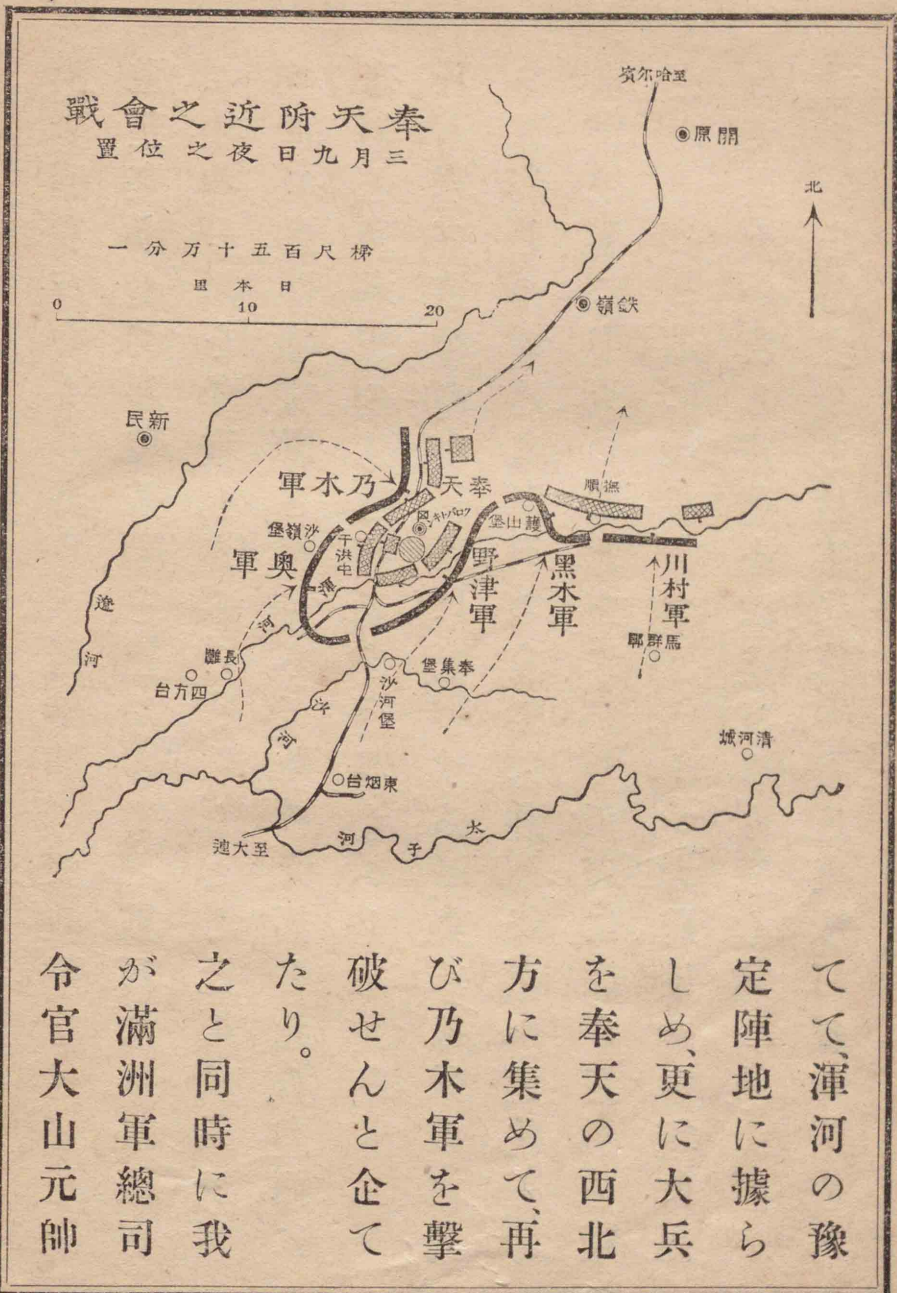
右翼後に在りたる豫備隊の大部を左翼に移して、極力東面を防ぎ、奉天鐵嶺間の背後連絡線を保護せんとせり。

我が最左翼たる乃木大將の軍は時至れりと見て、渾河及び遼河の間に在る敵兵を一掃し、四方臺附近の敵を撃破し、天馬空を行くの勢を以て北進し、三月二日突如として奉天の西方五里なる沙嶺堡附近に現れたり。クロバトキン大將の驚知るべきなり。乃ち大將は先づ其の手裡に残りし豫備隊を擧げて、乃木軍に當らしめ、更に右翼及び中央軍より精兵を抽きて之に加へたるも、遂に其の効なく、乃木軍の撃破する所となれり。

此の間、我が中央の各軍は猛然起ちて攻撃を始めしが、敵壘堅うして、惡戦苦闘を重ねること數日に及び、僅かに其の一部を奪取したるのみ。然れども此の攻撃は川村軍の馬群鄴攻撃と相待ちて、敵の大部を此の方面に牽制し、乃木軍の迂回運動を容易ならしめたり。

乃木軍が益敵の右側背に迂回するや、奥軍は敵の右翼を撃破しつゝ、逐次渾河の右岸に移りて之に連絡し、乃木軍は遂に奉天の西北方に出でて、將に敵の退路を斷たんとせり。是に於てクロバトキン大將は乃木軍に向ひて、屢大いなる逆襲を試みたるも、悉く其の効なきが爲、やむを得ず令を諸軍に傳へ、七日夜沙河の陣地を棄





は總進撃の命令を發し、全軍一齊に猛進す。川村軍は馬群鄂附近の敵陣地を奪ひ、破竹の勢を以て撫順に迫り、黑木、野津の兩軍は沙河の敵陣地を拔きたる後、直ちに敵を窮追して、撫順奉天間に於ける渾河の線に到り、奥軍は奉天の西方に迫り、乃木軍は奉天の北方に出でて、敵の退路をおびやかす、遂にクロパトキン大將をして其の最後の企圖を挫折せしめたるのみならず、我が中央の軍は晝尙暗き風塵に乗じて、九日渾河を渡り、其の右岸の敵陣地を分斷せり。クロパトキン大將が本國に向つて、余は包圍せられたり。との電報を發したるは蓋し此の時なるべし。かくて十日に至り、川村軍及び黑木

軍の一部は協力して撫順附近を攻略し、又黒木軍の主力及び野津軍は敵を追ひて奉天の東北方に突進し、息をもつがせず砲火をあびせられたれば、敵は全軍潰亂して鐵嶺方向に敗走せしが、其の一部は奉天附近に於て我が軍の爲に全く包圍せられ、混戰翌十一日に及び、伏屍累々として山野に充滿し、途を失して捕虜となる者、力盡きて軍門に降る者、其の數を知らず。

敵はかねて鐵嶺を以て最後の根據地とするの計畫を立て、堅固なる防禦工事を施したりしが、我が軍の神速なる追撃の爲、據守する暇も無く、東北六十里餘なる公主嶺の邊に逃走せり。かくて三月十六日を以て黒木軍

及び野津軍の一部は鐵嶺を占領し、川村軍は興京を陥れ、乃木軍の騎兵は更に開原、昌圖地方に進入したれば、南滿洲の山野又敵の隻影を留めず。奉天附近の大會戰こゝに全く終を告げぬ。

此の役や戰鬪を繼續すること半月を超え、敵の失ふ所兵員約九萬二千、大砲二十六門及び軍旗の外、小銃、彈藥、輜重車輛等の遺棄枚舉に暇あらず。實に有史以來未曾有の大戦、長戦、激戦にして、日本海海戦と共に古來稀なる大捷を獲たりしなり。

## 第三十課 學校園

梅は散りて鶯の聲も老いたり。春は漸くたけなはなら

んとす。

果樹園の桃の蕾は赤くふくらみたれば、五六日を出でずしてほころび出づべく、梨・苹果の花もそれより三四日とは後れざるべし。學年試験終りて、我等が高等二年に昇級する頃は、紅白美を競ひて花見の好時節となるべし。あゝ、希望多き春よ。

苗床の菊の苗は既に四五寸に延びたり。株分せんも今しばしなり。今年は去年よりも見事なる大輪の花を咲かせたきは我等が今日よりの願なり。コスモスの種も播終へたれば、秋の花盛りの美しさ想ひやらる。日を逐うて成長する植物を見るうれしさには草取り・培ひの

骨折も忘れぬべし。

鶏頭の種を蒔くに就いて想ひ出したるは學友某君なり。去年の今頃は我等と同じく鋤を取りて播種床に入などせしが、梅雨の頃より病にかゝり、九月の新學期君が植ゑし草の花咲く頃となりても、君は校堂に上ること能はず。十月の半、葉末に結ぶ白露と共に消行きし悲しさ。君の葬式の日、同級生一同が我が校園の鶏頭を捧げて禮拜せし時、君の兩親・親戚の泣崩れし有様、今も尙眼に残れり。今年はゆめかゝる凶事の無かれかし。今年始めて植ゑたる除蟲菊は害蟲驅除にも必要なるのみならず、蚤取粉として、蚊やりとして、効用廣きもの

なれば、收穫多からば、學校園の收入も増加すべし。蔬菜園の山東菜、白菜、體菜等は去年も出來好かりしが、大根と蕪菁とは甚だ不出來なりき。地味の合はざるにか、又は耕種の方法の宜しからざりしか。高等二年生の擔任せし區域は可なりの好結果なりきといへば、今年は尙一層注意せんとす。

今年は正月以來度々の降雪あり、雨量も適度なりしが如し。去年の七月中旬、長雨打續いての冷氣に、西瓜、南瓜等瓜類の收穫は甚だ不結果なりき。幸にして果物は梨、柿等いづれも上出來にて、秋季運動會の日には來賓一同にも分ちし程なりしが、今年は如何あるべき。先年接

木せし葡萄も今年は多くの實を結ぶならん。今年の氣候よ、願はくは順當なれ。

月日の過行くは梭の飛ぶよりも速し。昨日今日種を下し、苗を移せし花卉、野菜の花咲き實を結ぶもしばしの程ぞ。日々の課業と共に楽しきは我が學校園なり。待たるゝものは秋の日にこそ。

高等小學讀本 卷二終

大正二年二月八日 修正印刷  
大正二年二月十日 修正發行  
大正二年二月十五日 翻刻印刷  
大正二年二月廿五日 翻刻發行

著作權所有

著作兼  
發行

文部省

翻刻  
發行

東京市日本橋區新右衛門町十七番地  
日本書籍株式會社

印刷者

代表者 大橋新太郎  
東京市小石川區及堅町百〇八番地  
愛敬利世

印刷所

東京市小石川區及堅町百〇八番地  
博文館印刷所

大正二年二月十七日  
文部省檢査濟

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地  
株式會社 國定教科書共同販賣所

高等小學讀本卷二

定價金拾貳錢

375,98  
M